

京都府埋蔵文化財情報

第 57 号

中世土器の編年(上)-----	伊野 近富-----	1
大宮町左坂横穴群の検討-----	筒井 崇史-----	13
—平成7年度発掘調査略報—-----		20
1. 黒部遺跡	4. 京都縦貫自動車道関係遺跡(宮津工区)	
2. 奈具岡南古墳群	5. 植物園北遺跡第16次	
3. 中原城跡	6. 長岡京跡左京第353次(7ANFIR-2・FDN)	
資料紹介 平安京跡出土の中国製男子像について-----	小池 寛-----	30
府内遺跡紹介 67. 嵯峨院跡-----		34
長岡京跡調査だより・54-----		37
センターの動向-----		40
受贈図書一覧-----		42

1995年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

中世土器の編年(上)

伊野近富

1. はじめに

中世土器の研究は、1970年代になって、京都市内での発掘調査が盛んになるに従い急速に進展した。特に、編年に関しては、1980年頃にいくつかの試案がだされ、その後、たいした変動なく現在にいたっている。

今回は、京都府北部(丹波)の編年を提示して、大要を把握しておきたい。ここでは、筆者が近年提唱している原型・模倣型の考えを、実際の土器に適用してみたい。

なお、この小文は、伊野と森島康雄で実施した当センターの共同研究「中世土器の編年」の成果の一部である。

2. 研究史^(注1)

丹波における中世土器の編年については、山本三郎「丹波出土の土器について」(『兵庫考古』第4号、兵庫考古研究会 1976)が古い例である。その後、橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』によって、<丹波型>瓦器椀が提唱された。1984年には大内城跡の報告書のなかで福知山の資料を中心にしながらも丹波地域の編年表が公表された。そして、1985年には亀岡地域の瓦器椀についての概要と編年表が出された。これらの研究から、瓦器については3つの型式のあることが判明した。また、丹波型は郡程度の小地域ごとにあるものと、丹波一国に分布するもののあることが判明した。その後、基準資料となり得るものはほとんど出土していない。

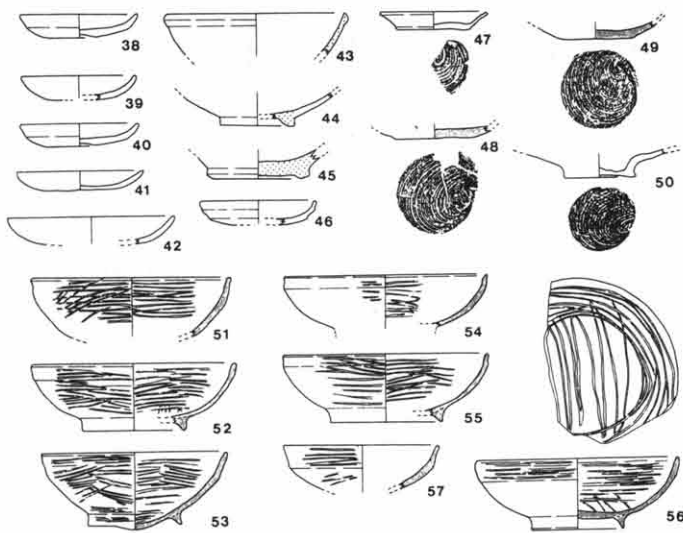
なお、中世後半については、現在のところ編年表は出されていないが、この時期の良好な資料は、宮津市中野遺跡や綾部市上林城跡で出土している。この、2つの遺跡で出土した洛外産土師器皿については百瀬正恒の論考がある^(注2)。丹波・丹後で発見の相次ぐものに、土師製の筒形容器がある^(注3)。従来、経塚に伴うものとされていたが、墳墓との関連性を説く杉原和雄の研究がある^(注3)。

3. 編年の基準資料

それでは、編年に必要な基準資料を呈示したい。年代観は平安京の土師器皿編年を援用したものである。

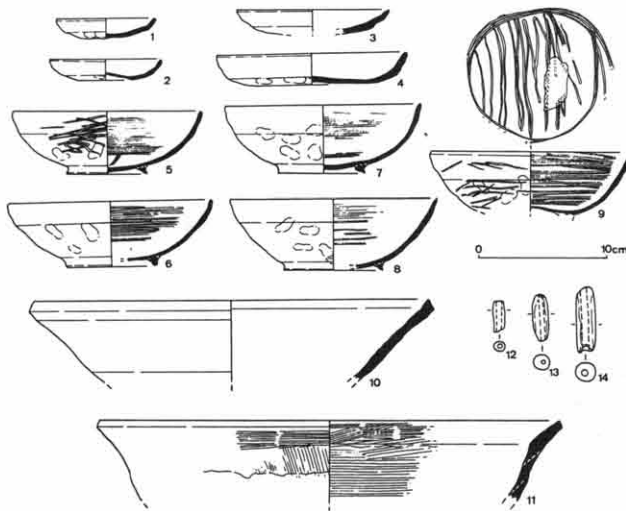
(1) 長遺跡^(注4)(綾部市新庄町)

綾部市の西部、犀川本流とその支流伊路屋川によって形成された沖積低地に位置する。土坑SK10の資料を呈示する。土師器皿の内、47は回転糸切りのものである。46は洛外模倣型で、12世



第1図 長遺跡S K10出土遺物実測図(1/6)

38~42・46・47. 土師器皿 43~45. 白磁碗
48・49. 黒色土器 50. 土師器杯
51~57. 瓦器碗



第2図 里遺跡S E01出土遺物実測図

1~4. 土師器皿 5~9. 瓦器碗 10. 須恵器鉢
11. 土師器鍋 12~14. 土錘

紀前葉に相当する。43は小振りの玉縁なので古相である。11世紀~12世紀初めか。45は玉縁状口縁(白磁碗IV類)の底部である。黒色土器はいずれも底部に回転糸切り痕を残す。京都北部通有の黒色土器である。瓦器碗は内外面ともミガキが密に施されており、古相を呈する。口縁部内側に沈線を施すもの(51・53・54)がある。ほとんどは、他地域の製品に比べて扁平である。また、口縁に対する底径の比率も0.44と大きい。この特徴は、これ以降に明確になる丹波型瓦器碗の特徴と同じである。50は土師器杯である。底部は回転糸切りで、内面はくぼむものである。これらの土器群はおよそ12世紀前半を中心とする時期と思われる。

(2) 里遺跡(綾部市里)

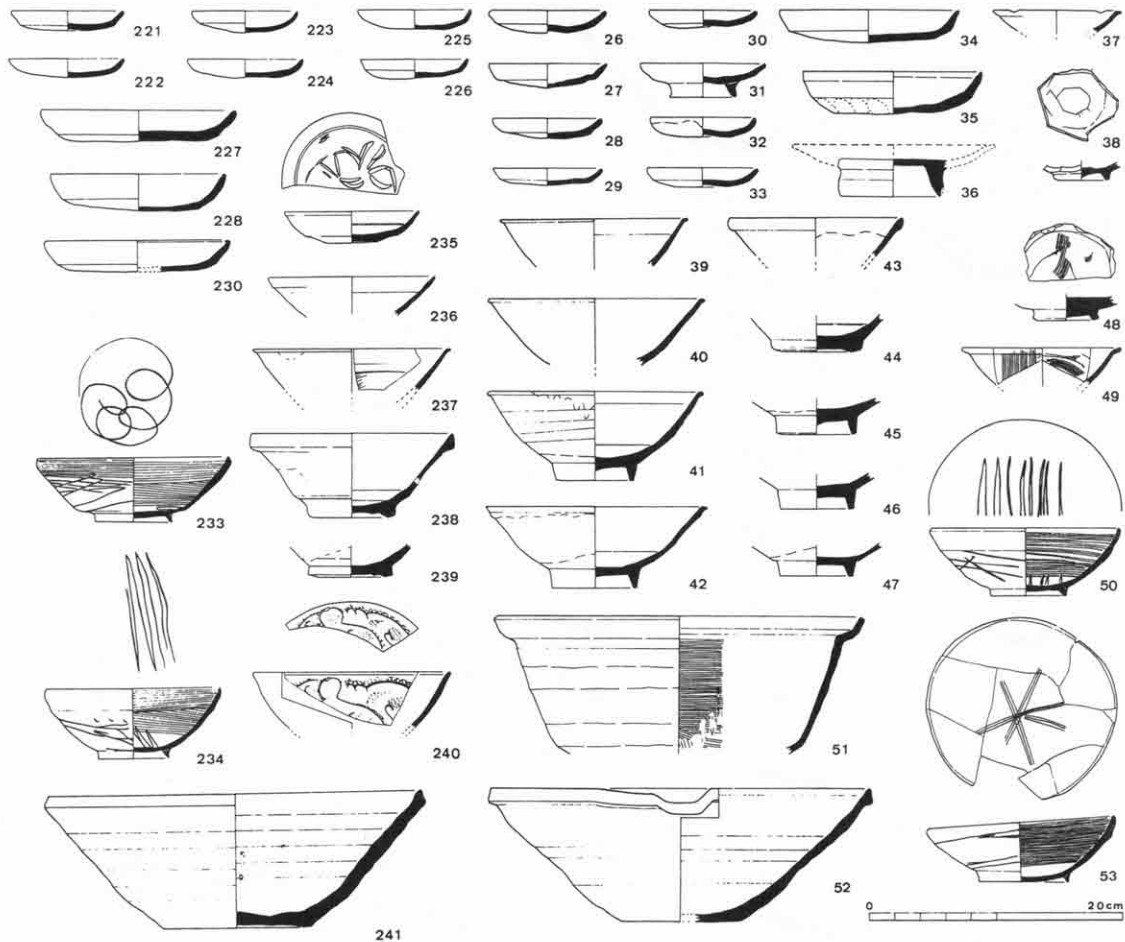
綾部市内を流れる由良川の北方500mの低位段丘上に位置する。S E01の資料を呈示する。土師器皿4は、洛外原型Dタイプを模倣したものである。瓦器碗は丹波型で、口径に対する底径の比率は0.43である。9は口縁部がやや厚くなったもので、これ以降の丹波型の特徴と同じ

である。外面のミガキはやや粗雑である。須恵器鉢10は東播系で、寛治五年(1091)銘のある左京四条一坊の例より2型式ほど新しい。土師器鍋は粗い胎土で、色調は暗褐色を呈する。内外面にハケ目を有する。丹波地域に通有のものである。これらは12世紀中葉前後か。

(3) 大内城跡(福知山市大内)

大内城跡は福知山市の東南部に位置する。前面には由良川の支流である竹田川と土師川とが流れている。大内は、中世に於いては六人部荘の中心地であった。大内城跡はこの荘園を管理していた荘官の屋敷跡と推定されている。

出土遺物は多種多様で、特に中国製陶磁器は1300片を数え、京都北部に於いて最大の出土量を



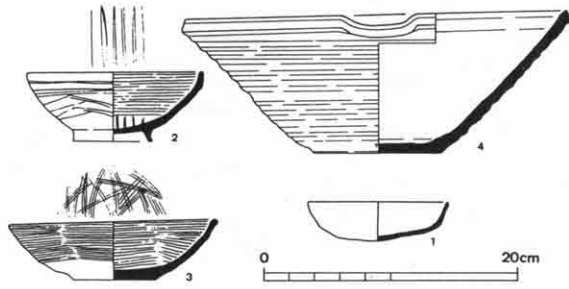
第3図 大内城跡S X 248(200番代)・S D 06(100番以下)出土遺物実測図

- | | |
|----------------------------------|--------------------|
| 28・29・31・34～36・221～228・230. 土師器皿 | 26・27・30・32. 瓦器皿 |
| 50・53・233・234. 瓦器碗 | 37. 青白磁杯 |
| 48・49・240. 青磁碗 | 38～47・236～239. 白磁碗 |
| 235. 白磁皿 | 51. 土師器鍋 |
| 52・241. 須恵器鉢 | |

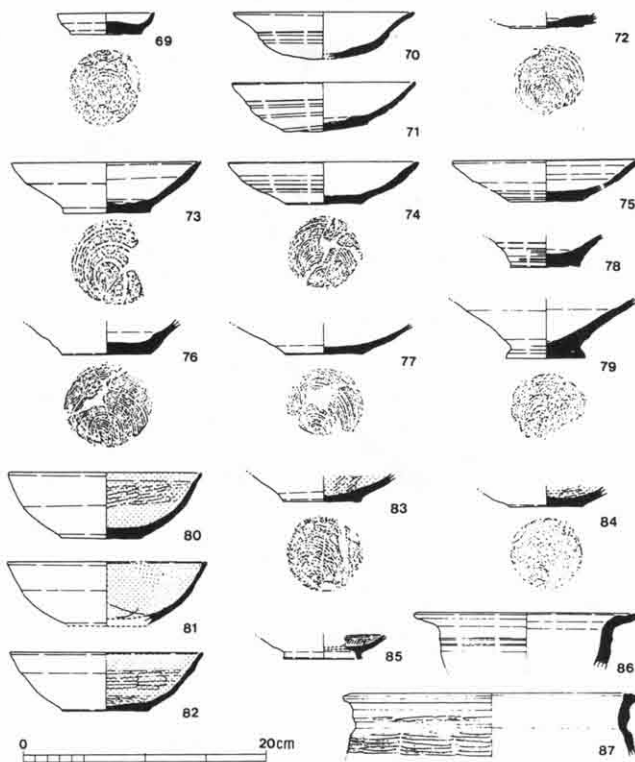
誇り、往時の経済力の高さを偲ぶことができる。ここではS X 248とS D 06の資料を提示する。土師器皿は、口縁部が面取り気味になる28や230のような洛外原型Aタイプを模倣したものの他、34や221・226のように、口縁部を一段に強くヨコナデした洛外原型Dタイプを模倣したものがある。高台付皿も平安京にあり、これを模倣したと思われる。胎土は良く、色調は淡褐色や黄褐色のものが多い。瓦器碗は体部が直線的なもの(Aタイプ)233や、丸形のもの(Bタイプ)234がある。体部外面のミガキは前代に比べて更に粗雑になっている。土師器鍋は山城原型(平安京で使用されたタイプ)を模倣したものである。須恵器鉢52・241はいずれも東播系のものである。白磁碗はIV類238とV類39～42の2種がある。青磁は龍泉窯碗240が図示されているが、同安窯系のものもある。この他、平安京以外での出土は珍しい瓦器盤(口径46cm)もある。

すなわち、大内城跡で出土するものは、中国製陶磁器に見られるように、他地域の原型と、土師器皿・鍋、瓦器碗などの平安京で使用された製品を模倣したもので占められている。これらの土器群は12世紀後半頃に比定できる。

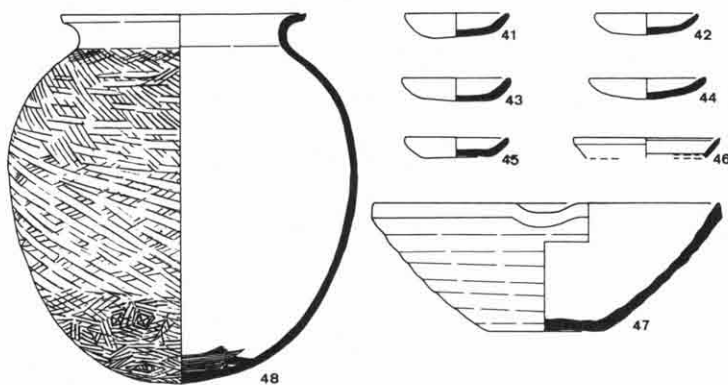
(4) 後正寺古墳(福知山市大内)



第4図 後正寺古墓出土遺物実測図
1. 土師器皿 2. 瓦器碗 3. 黒色土器碗
4. 須恵器鉢



第5図 城ノ尾古墳石室2次使用面出土遺物実測図
69. 土師器皿 70~79. 土師器杯 80~85. 黒色土器碗
86. 土師器甕 87. 土師器鍋



第6図 大道廃寺経塚出土遺物実測図
41~45. 土師器皿 46. 白磁皿 47. 須恵器鉢 48. 須恵器甕

大内城跡のすぐ南側の谷で検出された墓である。ここでは土師器皿、瓦器碗、黒色土器碗、須恵器鉢が、1点ずつではあるが共伴し、編年の基準資料となった。土師器皿は薄手で、歪みのあるものである。須恵器鉢は東播系のもので、丹波型瓦器碗の編年観とも12世紀中葉である。黒色土器は内外面ともミガキが密に施されたもので、平高台は退化しつつある段階のものである。

(5) 城ノ尾古墳(福知山市宮)

横穴式石室の中を2次的に使用した面
で出土した。大内城跡とは直線距離で1
kmほどしか離れていないにもかかわらず、
土師器杯や黒色土器碗は回転作用を
利用して製作されており、大内城跡の製
品が手づくね主体であるのとは全く違っ
ている。79の土師器杯は丹波・丹後で少
量出土する。86の土師器鉢(甕か?)は橙
褐色を呈したもので、丹波での出土量は
少ない。87の土師器鍋(丹波・播磨原型
鍋)は硬質に焼成されたもので、福知山
市域でよく出土する。類例は神戸市まで
求めることができ、加古川や由良川流域

に分布している。体部外面は、
横方向にタタキを施す。黒色土
器の平高台はほとんど退化し、
体部との境が不明確となっている
ので、12世紀後葉から13世紀
前葉頃が中心であろう。土師器
鍋は13世紀と思われる。

(6) 大道廃寺(福知山市今安)

福知山市の西部にある狭小な
谷(豊富谷)を見下ろす丘陵地に

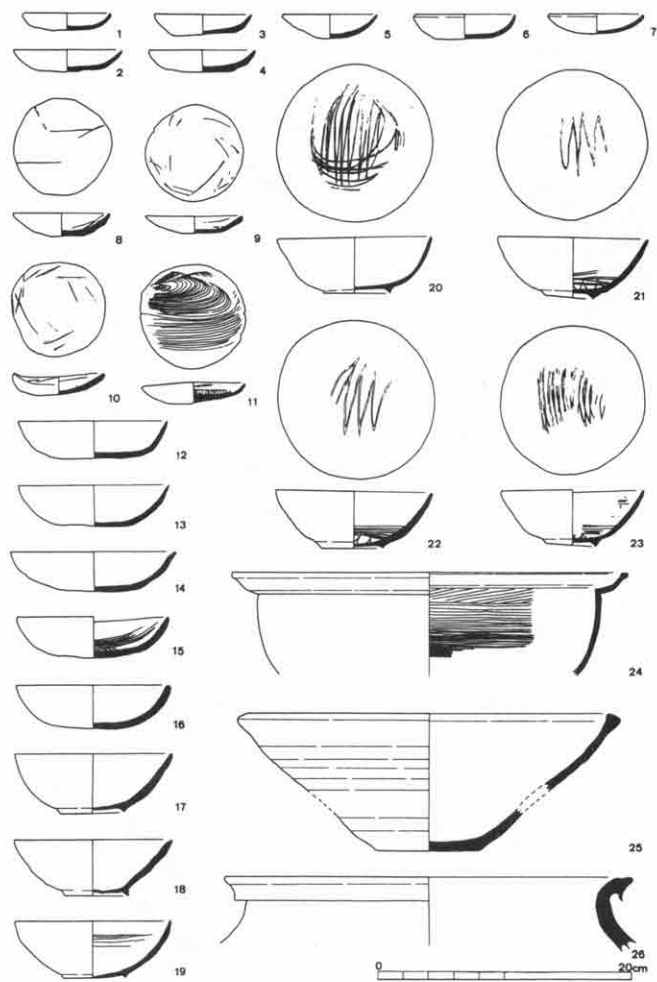
ある。ここでは、経塚の資料を提示する。須恵器甕の中に竹製の経筒を入れていた。これに東播系須恵器鉢を蓋として覆せていた。甕の外面はタタキを施し、内底面の一部にハケ目、他はナデである。土師器皿は丹波原型で、口縁部を一段ナデにし、器壁は平安京のものより少し分厚い。色調は黄褐色である。白磁皿はいわゆる「口禿」のものである。他に和鏡一面が出土した。これらの年代は13世紀前半頃と思われる。

(7) ^{にしまち(注10)}西町遺跡(綾部市西町)

西町遺跡は、JR綾部駅の北側に位置し、市街地の中心部に当たる。ここでは土坑S X01より出土した資料を呈示する。

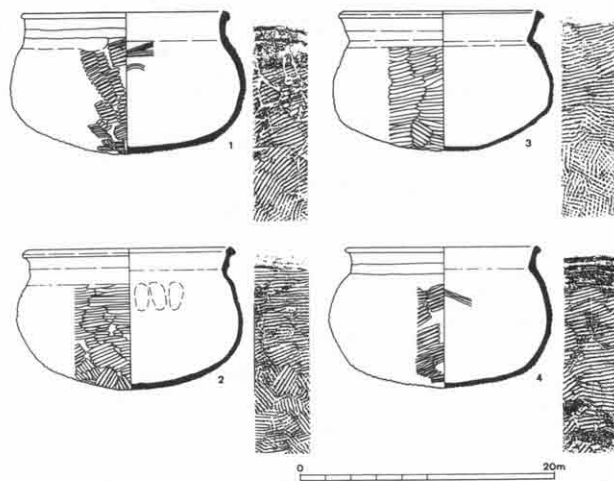
土師器皿は、口縁部を一段ナデにしたもので、小型は7.5~8.5cm。中型は11.7~13.1cmで、12cm前後が多い。色調は淡褐色や乳褐色である。8~10は板状工具またはヘラ状工具で、時計回りに削った痕がある。11の成形は、回転作用を利用して、粘土塊から円板を切り離して、その円板をもとにユビオサエ成形によって皿としたものである。この調査地で数点発見された。土師器碗は10数点発見された。プロポーションは瓦器碗と同様であるが、暗文は施さないようである。色調は黄褐色に、他の土師器より精良な胎土を使用している。瓦器碗は口径が11.2~12.5cmくらいで小型である。25は東播系須恵器鉢である。これらの年代観は13世紀後半と思われる。

(8) ^{やまだ(注11)}山田館跡(福知山市大内)



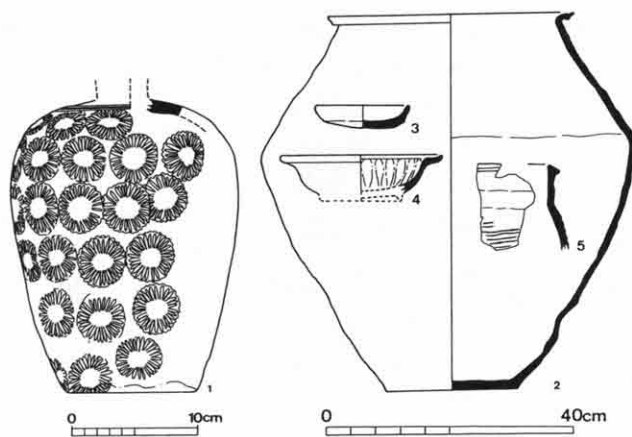
第7図 西町遺跡S X01出土遺物実測図

1~4・8~16. 土師器皿 5~7. 瓦器皿 17. 土師器碗
18~23. 瓦器碗 24. 土師器鍋 25. 須恵器鉢
26. 陶器甕



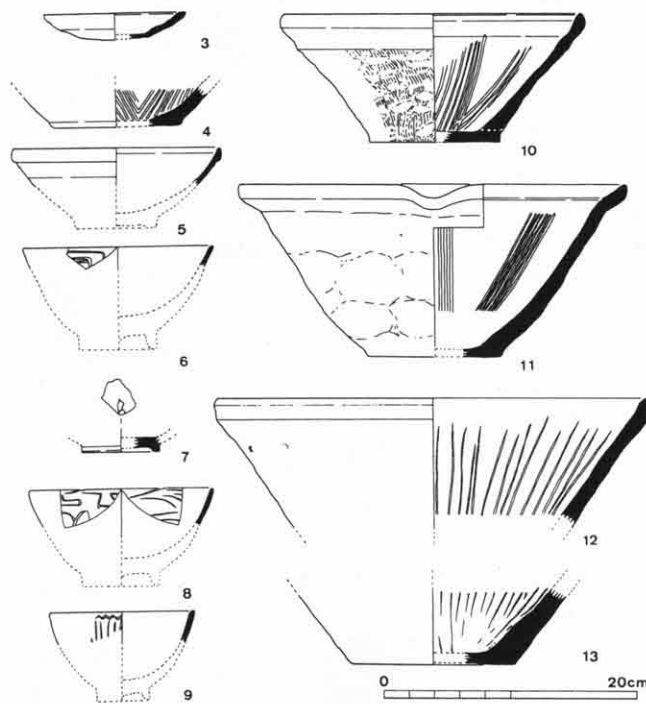
第8図 山田館跡出土遺物実測図(1)

1~4. 土師器鍋



第9図 山田館跡出土遺物実測図(2)

1. 瀬戸灰釉瓶子 2. 丹波焼甕 3. 土師器皿
4. 青磁鉢 5. 土師器鍋



第10図 多保市城跡出土遺物実測図

3. 土師器皿 4・10・11. 瓦器鉢 5. 白磁碗
6~9. 青磁碗 12・13. 丹波焼鉢

世紀の中に収まるものと思われる。

^{とおのいち(注12)}
(9) 多保市城跡(福知山市)

多保市城跡は、大内城から北方へ2kmほどにある遺跡で、2つの間には土師川が流れている。表土直下の遺物包含層から出土したものがほとんどである。3の土師器皿は洛外模倣型で、16世紀後半のものである。4・10・11は瓦器すり鉢で、それぞれプロポーションや、内面のすり目は違っている。中世後半になると丹波地域で多く出土する。5は12世紀前半の白磁碗である。8は龍泉窯青磁碗で、粗い雷文帯を施す。14~15世紀に属する。9は龍泉窯青磁碗で、蓮弁文を外

山田館跡は、大内城跡の南方約1.5kmの地点にある遺跡で、ここで中世の古墓群が確認された。この遺跡の特徴は火葬骨を埋納した容器が第8図のような土師器鍋であることで、稀に瀬戸灰釉や丹波焼甕などが使用されている。土師器鍋(丹波・播磨原型鍋)は体部外面に横方向のタタキを施したもので、内面はナデで調整している。色調は黄褐色で軟質である。口縁部は外側に丸く肥厚させている。三角形に肥厚する方が新しい。瀬戸灰釉瓶子は、外面に薄い緑色の灰釉がかかったもので、菊花文がスタンプされている。頸部から上は打ち欠かれて遺存していない。体部は大きく2片に割れていたが、その割れ口を漆でついで補修している。これらの年代観は14世紀前半が中心と思われる。

この他、龍泉窯青磁鉢(折縁、内面は蓮華文)4もある。丹波焼甕2は、体部を「く」の字に屈曲させたもので、それに小さな口縁をつけたものである。口縁部内面は一条の凹線がめぐる。

土師器皿3と鍋5はSX08より出土した。皿は分厚く、鍋の口縁部は断面三角形に肥厚する。前述の鍋の一群より新しい傾向であるが、これらも14

に施す。15世紀末～16世紀前葉に属する。12・13の丹波焼すり鉢は1本ずつヘラによりすり目を刻んだもので、口縁部の形をみれば15～16世紀のものである。すなわち、これらの遺物の年代観は15～16世紀に中心を置くと考えられる。

(10) ^{ひらやま (注13)}平山城跡(綾部市七百石町)

平山城跡は綾部市の市街地から北方約6.5kmの山中にある。ここでは、第一郭建物跡S B01に伴う焼土より出土した遺物を呈示する。

土師器皿(3～5)は洛外模倣型である。口縁部は尖り気味で、底部と体部との境は強いヨコナデによる凹線が明瞭に認められる。白磁皿は端反りのもので、高台は畳付のみが露胎で砂が付着している。これらは15世紀末から16世紀前半にみられるものである。16は青磁皿で、二次的に強い火熱を受けており、器面の損傷が激しい。底部外面を輪状に釉をかき取って露胎としている。17は青白磁の水滴である。上下に分割の型作りで、体部中位に接合痕がみられる。14世紀頃か。青花磁器(20)は草花文のもので、16世紀前半頃である。外面は粗いタテ方向のハケ目により調整した後、ヨコナデにより仕上げている。すり目は一条一条ヘラにより施される。22は越前焼すり鉢である。丹波地域での出土は珍しい。口縁部の内側に平坦面を作っている。すり目は11条を単位とする櫛によって施される。

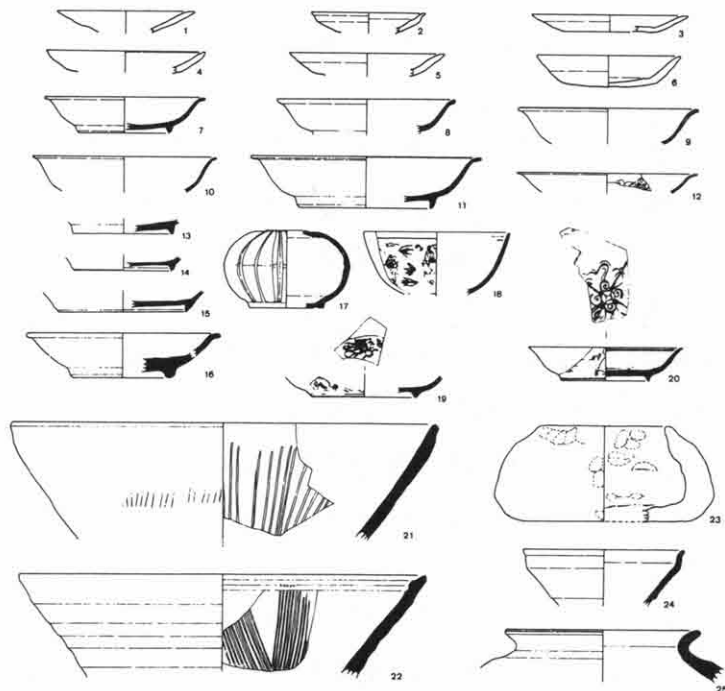
これらの年代観は中国製磁器が16世紀前半を中心とし、土師器が16世紀後半を中心とすることから、少しギャップが生じている。この訳は、上物を一括購入した時期があり、それを使用し続けた結果と思われる。

なお、187片の出土遺物による比率は土師器皿が22.99%、丹波焼が30.48%、白磁が27.27%で、これだけで80.74%を占める。

(11) ^{かんばやし (注14)}上林城跡(綾部市八津合町)

綾部市の東部にある上林谷は、福井県へ通じる谷である。この谷を見下ろす丘陵頂部に城跡がある。ここで紹介するのはS B03掘形に投棄された灰・炭混じり層に包含されていたものである。層位関係からS B03廃棄後S B04築造までの限られた時期のものといえる。

土師器皿は小皿(10cm未満)、



第11図 平山城跡第1郭S B01に伴う焼土出土遺物実測図

- | | | |
|-----------|-------------|------------|
| 1～6. 土師器皿 | 7～15. 白磁皿 | 16. 青磁皿 |
| 17. 青白磁水滴 | 18～20. 青花磁器 | 21. 丹波焼鉢 |
| 22. 越前焼鉢 | 23. 土師器壺 | 24. 瀬戸・美濃焼 |
| 25. 丹波焼壺 | | |

中皿(10~13cm)、大皿(13~16cm)、特大皿(16cm以上)の4種に分けられ、これらは製作・焼成技法によってA~Eの5類に分けられている。口縁部に煤が付着したものは5%に満たない。A類がもっとも多く50%を占める。いずれも精良な胎土を用い、色調は明赤褐色を呈するいわゆる赤焼きのものと、白褐色を呈する白焼きのものに分けられ、中・小では同量ある。但し、大皿以上のものに赤焼きは認められない。製作技法は、内底面を時計回りにヨコナデした後、最後を口縁部まで引き上げており、洛外原型の技法と同じである。

他の陶磁器の組成は平山城と同じで、端反りの白磁皿、すり鉢は越前焼と丹波焼、天目茶碗は瀬戸・美濃焼を使用している。瓦器鉢を主体とした多保市城の組成とは違い、経済力の差が認められる。これらは16世紀前半に属する。

3. 丹波地域の編年

丹波地域の編年については、かつて大内城報告で呈示したことがある。それは12世紀から14世紀までであったので、今回は15~16世紀の分をつけ加えたものを作成した。編年の基準としたものは、土師器皿である。年代の根拠については、大内城報告を参照していただきたい。

丹波地域の12~16世紀の土器群は11期に分けることができる。1期はおよそ30~40年ずつで、15世紀以降は未だ資料が少なく100年ほどで、今後資料の増加が待たれる。

I期は、瓦器碗(楠葉模倣型)、黒色土器碗、土師器杯(糸切り・Aタイプ)、土師器皿(糸切り・丹波原型)、土師器皿(洛外模倣型)、白磁碗で構成される。須恵器鉢は現在のところ確認されていない。基準資料は綾部市長遺跡S K10である。

II期は、瓦器碗(丹波原型)、黒色土器碗(内外面ミガキ顕著)、土師器皿(丹波原型、一般ナデ、手づくね)、土師器皿(洛外模倣型、二段ナデ、手づくね)、土師器鍋(Aタイプ)、須恵器鉢(東播系)で構成される。黒色土器碗や土師器鍋は丹後でも出土するものである。瓦器碗は、この段階で丹波原型となる。土師器皿は糸切りのものが少なくなり、手づくねのものが多くなる。基準資料は福知山市後正寺古墓である。

III期は、瓦器碗(丹波原型A~Cタイプ)、土師器皿(洛外原型A・Dタイプの模倣、一段ナデ、口縁部が角張るものもある)、龍泉窯青磁、同安窯青磁、白磁IV・V類、須恵器鉢(東播系)などで構成される。この段階で中国製陶磁の基本セット(龍泉・同安の青磁と白磁IV・V類)が揃う。この状態はIV期乃至V期頃まで続く。基準資料は福知山市大内城跡S X248である。

IV期は、瓦器碗(丹波原型A~Cタイプ)、黒色土器碗(ミガキ粗い、平高台の屈曲が緩やか)、土師器杯(B・Cタイプ、糸切り)、土師器皿(洛外模倣型・丹波原型)、中国製青磁・白磁、土師器鍋(洛外模倣型)、須恵器鉢(東播系)などで構成される。黒色土器はこの段階ではほぼ消滅する。また、土師器杯も同様である。土師器皿は洛外模倣型(口縁部一段ナデ、面取り手法)が顕著であるが、これは大内城跡のみの状況で、近隣の遺跡では糸切りの丹波原型が主体のようである。なお、黒色土器碗は丹後で主体的に使用され、丹波は少量使用されている。その変遷については加悦町滝岡田遺跡で確認された。この段階で消滅するようである。基準資料は福知山市大内城跡S

付表 丹波の中世土器編年表

	瓦器	黒色土器	土師器	土師器	土師器
1100 I					
II					
III					
1200 IV					
V					
VI					
VII		古瀬戸 			
1300 VIII					
IX					
1400 X					
1500 XI	美濃瀬戸 	染付 			

0 20cm

	青磁	白磁		須恵器
1100 I		8 9	10	
II				19 20
III	28	29 30	31	32
1200 IV	38	39 40	丹波焼 41	42
V		52	須恵器 53	54 55
VI				58
VII	66 67	丹波焼 68	69	70
1300 VIII	78	79		石鍋 80
IX		0 40cm		須恵器 87
1400 X	89			瓦質 90
1500 XI	100 101	白磁 102 103	丹波焼 104	0 20cm 105 106 107 108 109 110
			越前焼	

D06などがある。

V期は、瓦器椀(丹波Aタイプ)、土師器皿(洛外模倣型、丹波原型)、白磁皿(口禿)、須恵器甕(東播系)、須恵器鉢(東播系)などで構成される。この段階まで瓦器皿が少量ある。瓦器椀は口径が縮小し(Ⅱ期以降同様傾向)、外面のミガキは省略される。土師器皿の口径も縮小する(Ⅱ期以降同様の傾向)。基準資料は福知山市宮遺跡と、福知山市大道廃寺跡経塚がある。

Ⅵ期は、瓦器椀(丹波型A～Dタイプ)、土師器椀、土師器皿(丹波原型、一段ナデ、まれに糸切りの後手づくねのものあり)、瓦器鍋(山城模倣型)、須恵器鉢(東播系)などがある。中国製陶磁器の良い例はないが、龍泉窯鎬蓮弁文碗と、内面に花文のあるI-b類が出土する。基準資料としては綾部市西町遺跡S X01がある。

Ⅶ期は、瓦器椀(丹波型Aタイプ)、土師器皿(丹波原型)、中国龍泉窯鎬蓮弁文碗、須恵器甕(丹波・播磨型)、須恵器鉢(東播系)などがある。瓦器椀は内面のミガキが粗雑になり、高台も退化する。基準資料としては福知山市洞楽寺古墳S X01がある。

Ⅷ期は、瓦器椀(丹波型Aタイプ)、土師器皿(丹波原型・厚手)、土師器鍋(丹波・播磨型)などがある。これに瀬戸灰釉瓶子と、丹波焼甕がある。土師器鍋の口縁部は外側に丸く肥厚したものである。瓦器椀の内面のミガキは数条あるのみである。高台は断面三角形で小さい。基準資料は福知山市大内城跡S B131がある。

Ⅸ期は、瓦器椀(丹波型Aタイプ)、土師器皿(丹波原型)、土師器椀(ユビオサエ顕著)、土師器鍋(丹波・播磨型)、須恵器鉢(東播系)である。丹波原型の瓦器椀は、歪みが激しく、ミガキもほとんど省略されている。土師器椀はこの段階で消滅するらしい。基準資料は福知山市大内城跡S X300がある。

X期は、資料がほとんどなく不明な点が多い。瓦器椀は消滅する。中国製龍泉窯雷文帯青磁碗がこの段階の指標である。瓦質鉢もこの段階に出現する。基準資料は福知山市多保市城跡である。

XI期は、椀として美濃・瀬戸焼の天目茶椀、中国製龍泉窯細弁文碗がある。皿には土師器皿(洛外模倣型・丹波原型)、瀬戸・美濃焼、白磁端反りタイプがある。この段階に越前焼甕・鉢が目立つようになる。但し、主体は丹波焼である。また、青花磁器も出現する。基準資料は綾部市平山城館跡、上林城跡がある。

4. まとめ

以上、12世紀から16世紀まで11期に分けた。これは、大きく4段階にまとめることができる。

1段階 Ⅰ期。糸切り主流。瓦器椀は楠葉模倣型。地域色が明確な段階。

2段階 Ⅱ～Ⅳ期。平安京の影響が認められる段階。丹波型瓦器椀全盛。土師器皿は洛外模倣型と丹波原型が双方ともある。鍋は山城模倣型。

3段階 Ⅵ～Ⅸ期。土師器皿は丹波原型主体。地域色が明確な段階。

4段階 X～XI期。越前焼・瓦器鉢の出現。洛外模倣型の再出現。平安京(中世京都)の影響が

認められる段階。また、各地の土器が出土し、広域流通が盛んになった段階でもある。

(いの・ちかとも=当センター調査第2課調査第1係長)

- 注1 伊野近富「中世土器研究に関する基礎文献(1)」『京都考古』第54号 1990
- 注2 百瀬正恒「京都の土師器生産と搬入土師器」(『中近世土器の基礎研究Ⅱ』 日本中世土器研究会) 1986
- 注3 杉原和雄「経塚と墳墓—丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡について—」(『考古学雑誌』第74巻第4号) 1989
- 注4 井口一三「長遺跡発掘調査概報」(『京都府綾部市文化財調査報告』第21集 綾部市教育委員会) 1995
- 注5 田代 弘「綾部市里遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注6 伊野近富他『京都府遺跡調査報告書』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984
- 注7 岩松 保「(3)小屋ヶ谷古墳(付後正寺古墳)」(『京都府遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注8 辻本和美「(1)城ノ尾古墳」(『京都府遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注9 竹原一彦「第5章 大道廃寺跡の調査」(『京都府遺跡調査報告書』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注10 伊野近富・西岸秀文「西町遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注11 岩松 保「(2)山田館跡」(『京都府遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注12 伊野近富「(7)多保市城跡・同下層遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注13 鍋田 勇・森島康雄「平山城跡・平山東城跡」(『京都府遺跡調査報告書』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注14 中村孝行「上林城跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財発掘調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981

※原型とは、ある地域独特の型式で、模倣型とは、ある地域の原型を模倣した型式である。たとえば、山城原型とは山城地域で生産されたものである。洛外原型とは洛中で消費されたもので、生産がいわゆる洛外と呼ばれる地であったことでこう呼ぶ。

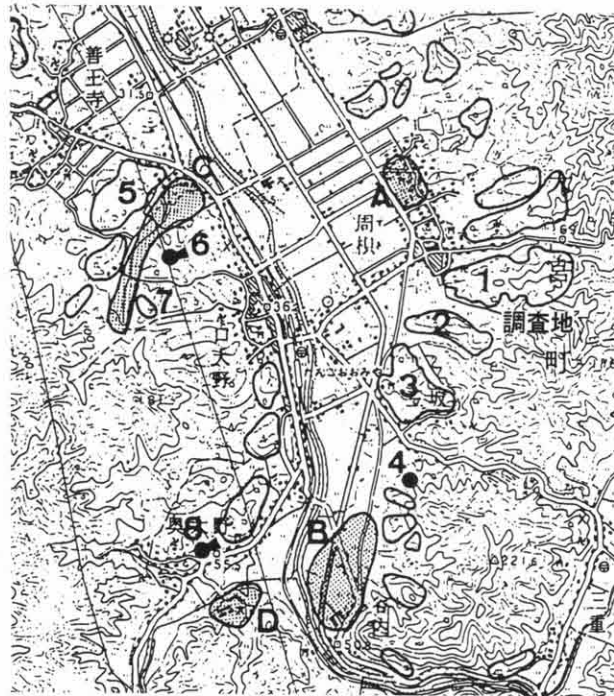
大宮町左坂横穴群の検討

筒井 崇史

1. はじめに

京都府中郡大宮町字周枳小字左坂ほかに位置する丘陵上には、総数110基以上から構成される左坂古墳群をはじめ、弥生時代後期の墳墓群や古墳時代後期末から奈良時代にかけて営まれた横穴群などが分布している。これらは、丹後国営農地開発事業の周枳団地造成工事ほかに先立ち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて発掘調査が行われており、大きな成果を得ている。発掘調査は、当調査研究センターのほか、京都府教育委員会・大宮町教育委員会によって実施されており、これまでに12回を数える(付表1)。

今回検討を行う左坂横穴群^(注2)については、これまでに左坂横穴A支群(1992・1995年調査)、左坂横穴B支群(1993年調



第1図 左坂横穴群周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

1. 左坂古墳群・横穴群・里ヶ谷横穴群 2. 帯城古墳群・大田鼻横穴群
3. 有明古墳群・横穴群 4. 大谷古墳 5. 小池古墳群
6. 十二社古墳群 7. 通り古墳群 8. 新戸1号墳
A. 大宮売神社遺跡 B. 谷内遺跡 C. 菅外遺跡 D. 裏陰遺跡

付表1 左坂地区調査一覧表

番号	調査名	回数	調査期間	調査機関	概要報告書
1	左坂古墳群	1次	1990. 6. 7～1990. 9. 30	京都府教育委員会	注1①文献
2	左坂古墳群	2次	1990. 8. 16～1991. 3. 7	京都府埋文センター	注1⑤文献
3	左坂横穴A支群	1次	1992. 4. 14～1992. 7. 31	京都府教育委員会	注1②文献
4	左坂古墳群	3次	1992. 6. 17～1992. 12. 19	京都府教育委員会	注1④文献
5	左坂古墳群	4次	1992. 6. 25～1992. 10. 22	京都府埋文センター	注1⑤文献
6	里ヶ谷横穴群		1992. 8. 24～1993. 1. 8	京都府埋文センター	注1③文献
7	左坂古墳群	5次	1992. 11. 24～1994. 4. 5	大宮町教育委員会	
8	左坂横穴B支群		1993. 5. 11～1993. 8. 30	京都府埋文センター	注1⑥文献
9	左坂古墳群(B支群)	6次	1993. 5. 27～1994. 3. 7	京都府埋文センター	
10	左坂古墳群(B支群)	7次	1994. 7. 25～1995. 3. 3	京都府埋文センター	
11	左坂横穴A支群	2次	1995. 4. 17～1995. 7. 13	京都府埋文センター	
12	左坂古墳群(C支群)	8次	1995. 7. 12～1995. 8. 8	京都府埋文センター	

査)、里ヶ谷横穴群(1992年調査)の3横穴群について発掘調査を実施している。これらは、すでに概要報告がなされているが、調査機関や調査年が異なるため総括的な検討はなされていない。小稿では、この点をふまえて、左坂横穴群について総括的な検討を加えることにしたい。

2. 左坂横穴群の分布状況

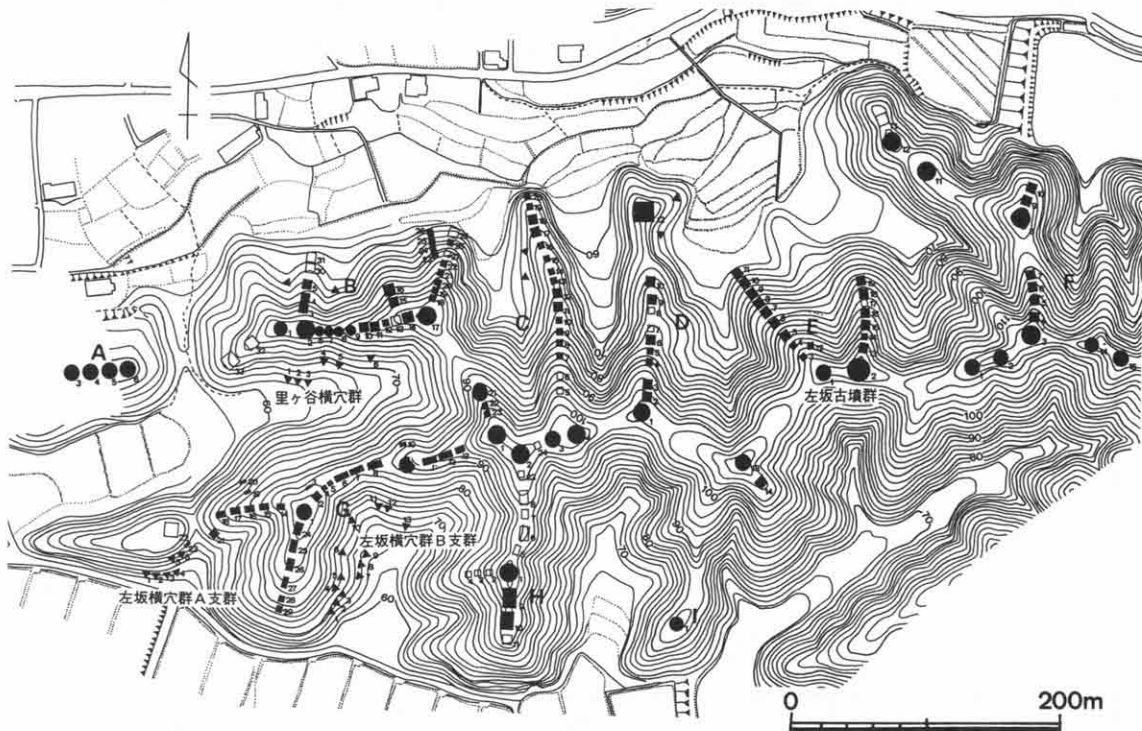
左坂横穴群において調査されている横穴の総数は22基に達する。その分布状況は、第2図に示すとおりである。以下、各横穴群の概要について各調査概報から要約する。^(注3)なお、各横穴の概要については、付表2を参照していただきたい。

里ヶ谷横穴群 1992年に調査。左坂横穴群の分布する丘陵の西端に位置する支尾根に営まれた横穴群である。6基が確認されており、造成地外となった1基を除く5基について、当調査研究センターが調査を行っている。調査の結果、里ヶ谷横穴群は、古墳時代後期末から飛鳥時代中頃にかけて営まれたものであることが明らかになった。丹後地方では古墳時代後期末頃から横穴の導入が認められており、里ヶ谷横穴群で確認された4号・5号横穴などのように無袖長方形の玄室平面形を呈するものが、最古の横穴と考えられている。

左坂横穴A支群 1992・95年に調査。左坂横穴群の分布する丘陵の南側斜面に形成された小さな谷状地形に営まれた横穴群である。6基が確認されており、1992年に4～6号横穴の調査が京

付表2 左坂横穴群一覧表

横穴群名	横穴名	平面類型	玄室			前庭部		備考
			全長	奥壁幅	玄門部幅	全長	幅	
里ヶ谷横穴群	2号横穴	その他	1.3	1.9	1.2	2.7	1.2	羨道有(長さ0.3m)
	3号横穴	I類	2.6	1.2	0.7	2.3	0.8	
	4号横穴	I類	3.0	1.5	1.0	3.9	1.0	
	5号横穴	I類	2.8	1.7	0.9	2.8	0.9	
	6号横穴	I類	1.9	1.3	0.8	2.2	1.4	「コ」字形前庭部
左坂横穴A支群	3号横穴	II類	2.6	2.6	0.8	6.3	0.6	
	4号横穴	II類	3.0	2.9	1.1	5.3	1.1	
	5号横穴	II類	2.8	2.4	0.8	4.4	0.6	
	6号横穴	II類	2.7	2.2	0.8	5.5	0.9	
左坂横穴B支群	1号横穴	III類	1.0	0.9	0.6	1.9	—	焼骨埋納
	2号横穴	III類	0.9	0.6	0.4	1.6	—	焼骨埋納
	3号横穴	III類	0.6	0.6	0.3	0.9	0.4	
	4号横穴	II類	3.2	2.7	0.9	6.1	1.3	「コ」字形前庭部
	5号横穴	II類	3.2	1.8	0.7	5.2	2.1	「コ」字形前庭部
	6号横穴	III類	1.6	1.4	0.4	4.5	1.2	「コ」字形前庭部、焼骨埋納
	7号横穴	II類	2.4	2.2	0.6	5.4	1.5	「コ」字形前庭部
	8号横穴	II類	2.3	2.3	0.9	1.7	0.9	
	9号横穴	II類	2.2	2.1	0.6	5.6	1.5	「コ」字形前庭部
	10号横穴	III類	0.8	0.9	0.5	2.6	0.7	
	11号横穴	III類	0.9	1.1	0.4	4.0	0.3	「コ」字形前庭部
	12号横穴	III類	0.7	0.8	0.6	2.8	0.5	「コ」字形前庭部
	13号横穴	III類	0.4	0.4	0.3	2.0	0.3	



第2図 左坂古墳群・横穴群分布図

都府教育委員会によって行われた。3基ともフラスコ形の玄室と墓道状の前庭部を有する、ほぼ同形態の横穴である。横穴は7世紀中頃から8世紀前半頃まで営まれていたと考えられている。

3号横穴は、工事の都合上、調査の必要性が認められたため、1995年に当調査研究センターが調査を行った。調査の結果、フラスコ形の玄室と墓道状を呈する前庭部が確認された。出土遺物から7世紀初頭の築造と考えられる。

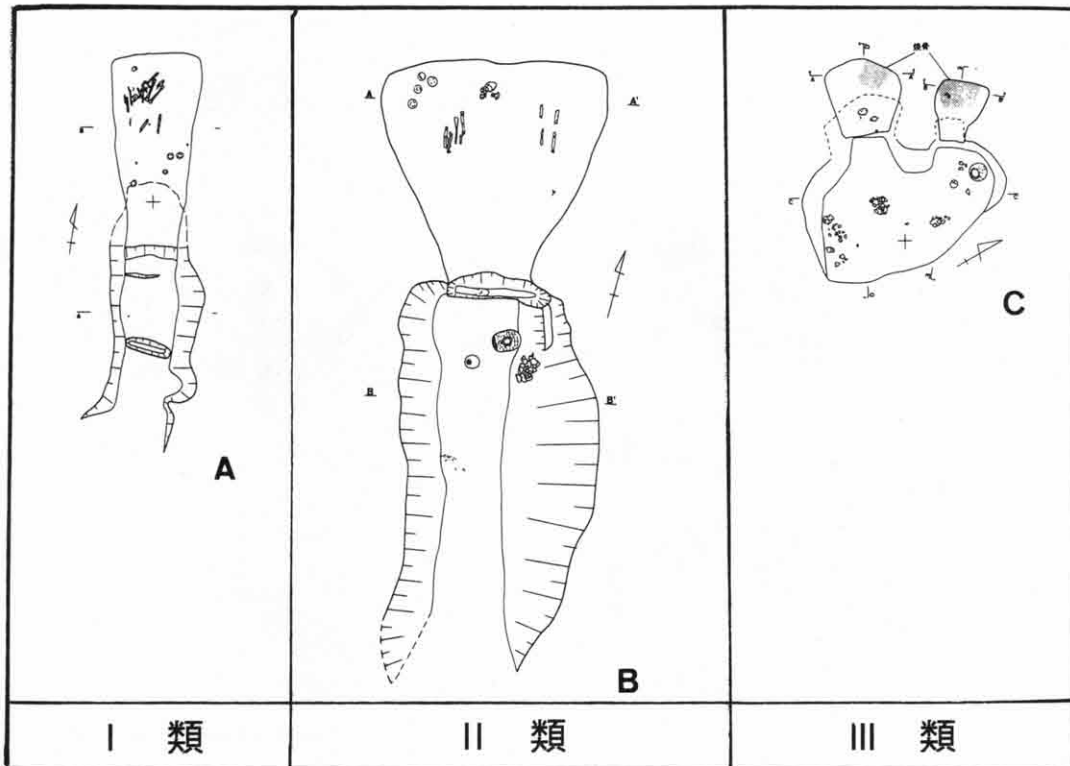
左坂横穴B支群 1993年に調査。左坂横穴A支群の東側に位置する小さな谷状地形に営まれた横穴群である。左坂横穴B支群では、玄室長2m以上を測る大型の横穴5基と、同じく1m未満の小型の横穴8基の計13基が検出された。大型の横穴は、左坂横穴A支群同様、フラスコ形の玄室と「コ」字形を呈する墓道状の前庭部を有する。小型の横穴は、不定形の玄室と墓道状を呈する前庭部を有する。小型の横穴8基のうち3基から焼骨を検出している。丹後地域に火葬の風習が伝播したことを考える上で重要な遺跡である。^(注4)

3. 左坂横穴群の分類

左坂横穴群では、須恵器・土師器や鉄器類が出土している。特に土器資料は多く出土しており、横穴の築造年代や追葬回数を知る上で重要である。出土須恵器の年代からおおむね左坂横穴群は、古墳時代後期末から奈良時代中頃にかけて営まれたものと考えられる。^(注5)

小稿では、各横穴の時期については、各概要報告による年代観をほぼ踏襲するものとし、ここでは各横穴の平面形態について検討を行うことにする。

平面形態の分類 各横穴の玄室・前庭部の平面形態については、各概要報告でも触れられてい



第3図 左坂横穴群玄室平面形態分類図(1/100)

A：里ヶ谷横穴群 3号横穴 B：左坂横穴A支群 4号横穴
C：左坂横穴B支群 1・2号横穴

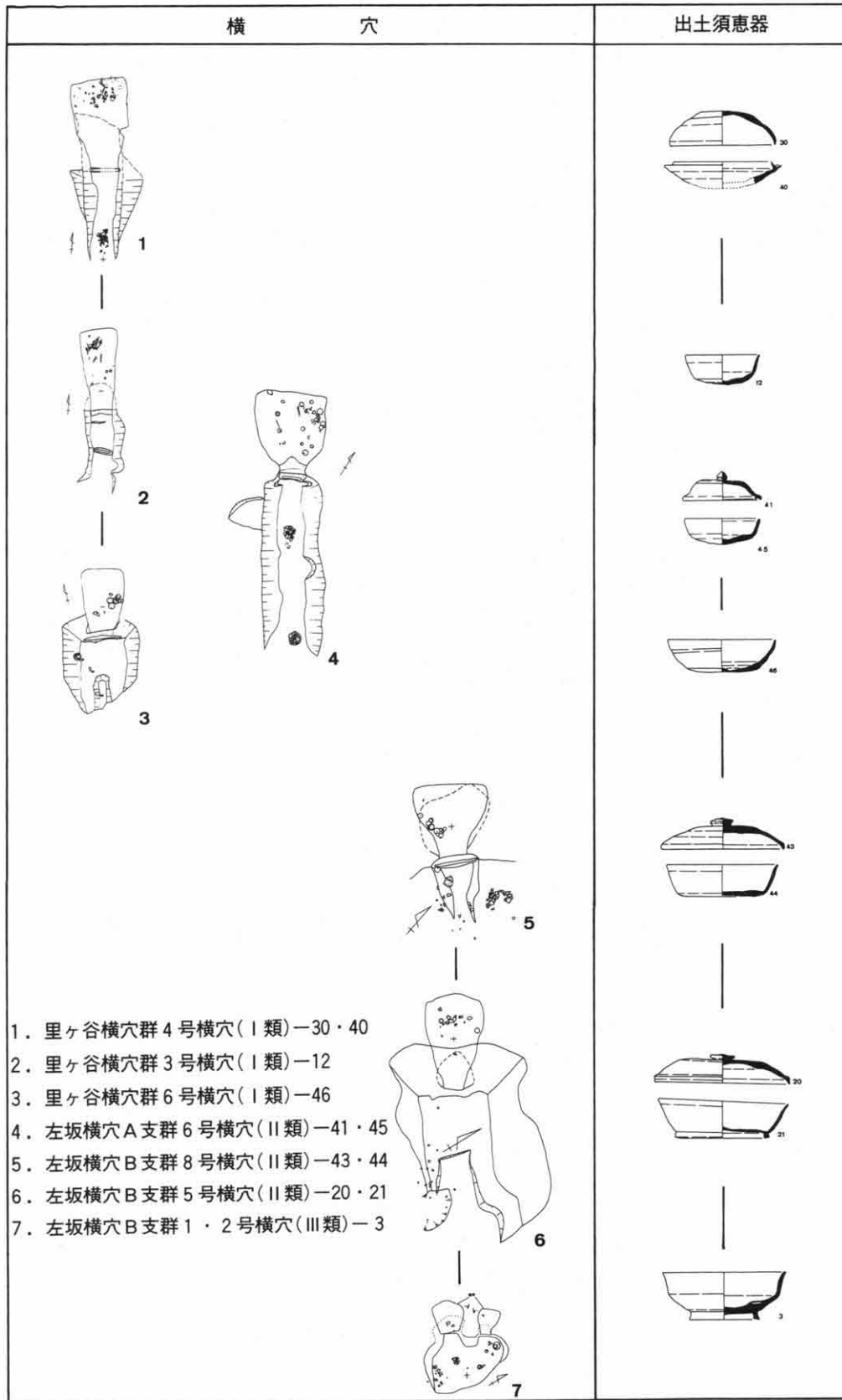
るが、ここでは左坂横穴群全体からみた各横穴の分類を試みることにしたい。

I類 玄室平面形が無袖長方形を呈するもの。里ヶ谷横穴群で4基確認されている。前庭部は、墓道状を呈する(第3図A)。左坂横穴群の南方に所在する有明横穴群^(注6)・大田鼻横穴群^(注7)においても同形態の横穴が確認されており、いずれの横穴群においても陶邑古窯址群におけるTK209型式併行ないし山田邦和氏のいうTK217古段階併行と思われる須恵器が出土している。

II類 玄室平面形がいわゆるフラスコ形を呈するもの。左坂横穴群A支群・B支群において多数認められる。前庭部は墓道状もしくは「コ」字形を呈する(第3図B)。このII類の玄室平面形は、南隣りの大田鼻横穴群の報告の中では、B型に分類されていたもので、同横穴群では30基中21基がこれに属する。左坂横穴群においても調査された22基中9基がII類であり、この形態の横穴が大宮町域では主流を占めるものと考えられる。出土している須恵器の型式から飛鳥IIIないしIV期段階から平城II期段階^(注8)にかけて築造されたものと思われる。

III類 玄室規模が1m未満のもので、平面形はフラスコ形のやや崩れたような形態を呈する。前庭部は、墓道状を呈する(第3図C)。左坂横穴B支群で8基確認されている。III類の横穴は出土遺物が少ないため時期については不明な点が多いが、おおむね平城I期段階から同III期段階に平行するものと考えられる。

平面形態から見た横穴の変遷 左坂横穴群の各横穴を玄室平面形にもとづいて分類すると、大きく3類型に分けることができた。まず、玄室平面形と出土遺物の関係について検討してみる。



第4図 左坂横穴群変遷図(横穴は1/200 土器は1/8)

最も古く位置づけられるのは、TK209型式ないしTK217古相段階の須恵器が出土しているⅠ類の横穴である。Ⅰ類の横穴は、左坂横穴群においては、里ヶ谷横穴群においてのみ確認されている。これに続くのは、平面形がフラスコ形を呈するのⅡ類の横穴である。大田鼻横穴群同様、左坂横穴群においても主体をしめる横穴である。左坂横穴A支群およびB支群において確認されている。なおA支群では調査されたすべての横穴がⅡ類であるのに対して、B支群ではⅢ類の横穴も多数確認されている。最も新しく位置づけられるのは、Ⅲ類とした横穴で、左坂横穴B支群において確認されている。大宮町内では、竹野川の対岸に位置する裾谷遺跡で、焼骨を埋納した同形態の横穴が1基確認されているが、大田鼻横穴群などでは確認されていない。^(注10)

出土土器の年代観から玄室の平面形については、Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲ類という大まかな流れを明らかにすることができた。ただし、各類型はかなりの期間併存するものと思われる。

次に、玄室平面形を型式学的に見た場合どのような変化を指摘しうるのか、述べることにする。

Ⅱ類は、Ⅰ類のような無袖長方形ものが、その奥壁幅を大きく取ることによって成立すると考えることができるのではないだろうか。この場合、里ヶ谷2号横穴のような両袖式の玄室平面形を有する横穴の影響を考えるとできよう。Ⅲ類は、玄室平面形がフラスコ形の崩れた形状に近い点や比較的狭長な墓道を有することから、Ⅱ類の横穴が縮小・退化した形態であると考えられる。この点については、左坂横穴B支群6号横穴のように、Ⅱ類とⅢ類の折衷型と思われる横穴が存在することからも支持できよう。なお、こうしたⅢ類のような横穴の出現については、小骨の埋納、すなわち火葬の風習というものとの関係が深いものと思われる。^(注11)

以上をまとめて図示すると、第4図のようになる。

玄室平面形と前庭部平面形 今回詳しく触れなかったものの、前庭部の変化についても注意できる。すなわち、Ⅰ類では玄室と一連の墓道状を呈する前庭部であるのに対して、Ⅱ類ではいわゆる「コ」字形を呈し、かつ墓道状を呈する前庭部が主流を占める。この種の前庭部は、里ヶ谷横穴群6号横穴や左坂横穴B支群4号横穴などで認められ、新しい時期の横穴に対応していることが分かる。Ⅲ類については、玄室と一連の墓道状を呈する前庭部やいわゆる「コ」字形を呈する前庭部あるいは、2基の横穴が前庭部を共有するなど多種多様な例があり、前庭部に関する限り原則を認めることはできない。

4. 小 結

今回の報告は、すでに6年にわたって調査の続けられている大宮町字周枳小字左坂ほかに所在する遺跡の調査のうち、調査機関が異なるために、総括的な検討が不十分であった横穴群についてまとめたものである。筆者自身は、左坂横穴B支群の調査担当者としてすでに概要報告は行っているものの、周辺に所在する他の横穴群、なかでも同じ丘陵に所在する里ヶ谷横穴群や左坂横穴A支群との検討を十分行えないままに報告を行っている。小稿では、以上の点を省みて、横穴の玄室平面形という点から若干の考察を試みた。

その結果、左坂横穴群は、その玄室平面形を変化しながら逐次築造されていったことが明らか

になった。左坂横穴群の分布状況は、小規模な谷ごとに支群が形成されるという様相を呈する。なお、横穴の平面形の違いは、これまでの検討から時間差を示すものであって集団の違いを示すものではないと思われる。

小稿では、丹後地域でも最大級の横穴群である大田鼻横穴群との関わりについても十分な検討を行うことができなかつた。大宮町域に限らず丹後地方あるいは日本海沿岸域の横穴群も視野に入れた検討を行うことを今後の課題としたい。

(つつい・たかふみ＝当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 左坂古墳群・横穴群の調査成果については、以下のような報告が行われている。

- ①肥後弘幸「(2)左坂古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1991)』 京都府教育委員会) 1991
- ②肥後弘幸「[2]左坂横穴」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』 京都府教育委員会) 1993
- ③石崎善久「(2)里ヶ谷横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- ④肥後弘幸「[7]左坂墳墓群(左坂古墳群G支群)」(『埋蔵文化財調査概報(1994)』 京都府教育委員会) 1994
- ⑤石崎善久「(1)左坂古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- ⑥筒井崇史「(2)左坂横穴群(B支群)」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注2 平成4年度に当調査研究センターが、発掘調査を行った里ヶ谷横穴群を含む総称として左坂横穴群と称する。

注3 注1②・③・⑥各文献参照

注4 この点については、注1⑥文献でやや詳しく触れた。

注5 なお、丹後地域におけるこの時期の土器編年については、集落遺跡の調査例が少ないこともあって、十分明らかになっていない。

注6 増田孝彦「(1)有明古墳群・横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注7 岡田晃治他「[2]大田鼻横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1987

注8 山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」(『古代文化』第40巻6号 (財)古代学協会) 1988

注9 ①奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』 1976

②奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』 1978

注10 筒井崇史「(7)裾谷横穴・遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注11 ただし、焼骨を埋納しないⅢ類の横穴の存在も知られており、両者の関係が今後の検討課題になるものと思われる。注1⑥・注10両文献参照。

平成7年度発掘調査略報

1. 黒部遺跡

所在地 竹野郡弥栄町大字黒部小字仲谷・金屎・青谷ほか

調査期間 平成6年4月18日～平成7年7月11日

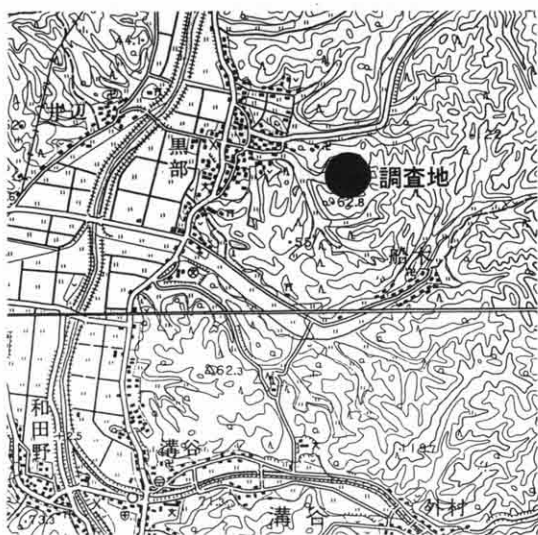
調査面積 約7,800m²

はじめに 今回の黒部遺跡の調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)に伴い、同局の依頼を受けて実施したものである。

この遺跡は、『京都府遺跡地図』には記載されていないが、この付近で鉄滓が表採されたことなどから、遺跡の存在が想定できたため、平成5年度から発掘調査を継続して行ってきた。その結果、この黒部遺跡は製鉄遺跡であることが確認された。これまで、竹野川左岸地域では弥栄町内で遠所遺跡群やニゴレ遺跡などの製鉄遺跡が認められているが、この遺跡の確認によって、竹野川右岸地域まで製鉄遺跡の存在することが明らかになった。今回は、平成6年度以降の概要を報告する。

調査概要 黒部遺跡では、大きな谷筋ごとに石熊・仲谷・青谷・金屎地区と名付け、試掘調査で炭窯や製鉄炉を検出した地点で重点的に発掘調査を実施した。その結果、製鉄炉10基と登り窯状の炭窯33基、小型の炭窯4基を検出するに至った。出土遺物は少量ではあるが、その大半は8世紀後半のものであり、一部9世紀前半のものがある。

この黒部遺跡では、遠所遺跡群やニゴレ遺跡と比較すると、炭窯のほとんどが登り窯形態であ



調査地位置図(1/50,000)

り、しかも製鉄炉付近に集中する傾向が見られた。横口を持つ炭窯や丘陵斜面を「L」字状に掘削して構築した平窯状の炭窯は見られなかった。これは、登り窯状炭窯を採用した一時期に集中して鉄生産が行われた結果と考えられる。丹後地域での炭窯の変遷を考える上で、貴重な資料になると思われる。

製鉄炉の形態は、遠所遺跡群で確認されたような「U」字状の溝を設けて中に粉炭を敷き詰めた下部構造を持つ箱形炉(仲谷7号製鉄炉など)以外に、ニゴレ遺跡で確認されたような下部構造を持たない小型化した製鉄炉(仲谷3号

黒部製鉄遺跡 製鉄炉規模一覧表

(残存長、赤色被熱範囲を計測)

	長さ	幅	高さ	排滓溝	炉形	操業時期
石熊1号製鉄炉	3.5m	0.8m	0.2m	片側	長方形箱形炉	9世紀前半
石熊2号製鉄炉	0.5m	0.3m		不明	〃	〃
仲谷1号製鉄炉	2.5m	1.1m	0.3m	両側	〃	
仲谷2号製鉄炉	不明	不明	不明	片側?	〃	
仲谷3号製鉄炉	3.5m	0.6m	0.1m	片側	〃	9世紀前半
仲谷4号製鉄炉	3.4m	0.9m	0.3m	両側	〃	
仲谷5号製鉄炉	2.8m	1.1m	0.5m	両側	〃	8世紀中頃
仲谷6号製鉄炉	2.7m	1.0m	0.5m	両側	〃	8世紀中頃
仲谷7号製鉄炉	2.9m	0.9m	0.3m	両側	〃	8世紀後半
仲谷8号製鉄炉	3.6m	1.1m	0.5m	両側	〃	8世紀後半

製鉄炉)も検出した。これらは、出土遺物から見て、9世紀前半頃に操業していたと考えられる。

今回の調査成果をまとめると、以下のようなになる。

8世紀の黒部遺跡では、登り窯状炭窯が大半をしめ、円形や方形の小型炭窯が少ないことが判明した。また、製鉄炉の付近に登り窯状の炭窯を構築しており、1基の炭窯あたり数回の操業が確認できたことから、大規模に鉄生産が行われていたと思われる。

9世紀前半には、黒部遺跡で下部構造をもたない小型製鉄炉が確認された。ニゴレ遺跡でも同様の施設が9世紀末または10世紀の時期に認められる。したがって、丹後地域では、9世紀になって下部構造をもたない小型の製鉄炉が出現し、製鉄生産に少しずつ変化が認められるようになったことは指摘できよう。このことが鉄生産全体の工程から簡略化につながるかどうかはわからないが、今後整理作業を進めて、遠所遺跡群やニゴレ遺跡で検出した遺構の内容と検討を行った上で、これらの問題点を整理したい。

(岡崎研一)

2. 奈具岡南古墳群

所在地 竹野郡弥栄町字黒部小字奈具岡
 調査期間 平成6年9月9日～平成7年5月26日
 調査面積 約340m²

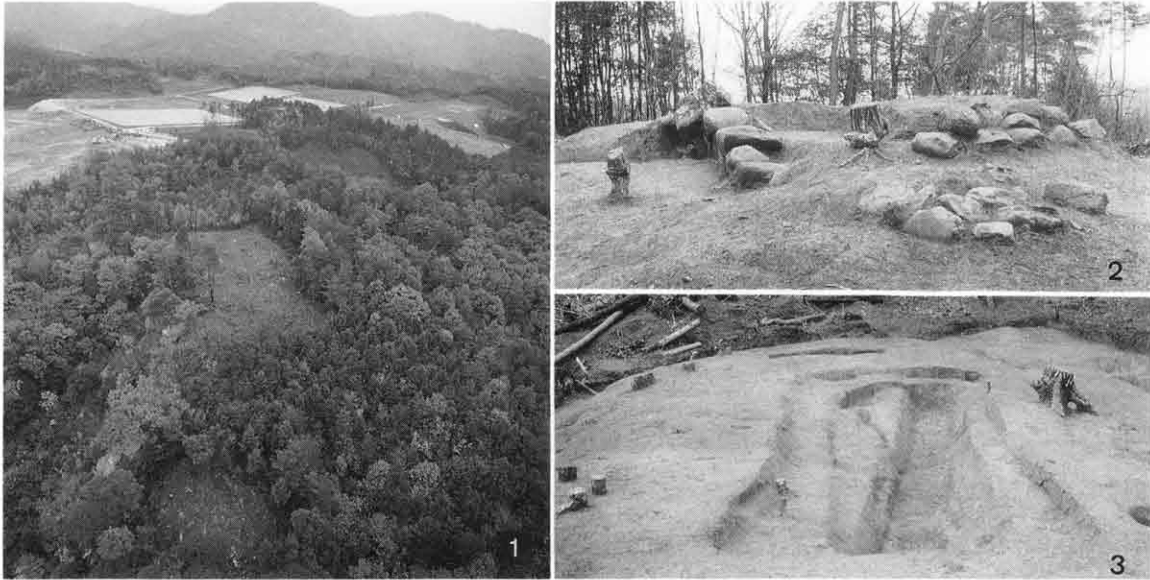
はじめに 竹野川右岸に舌状に張り出した台地である奈具岡の丘陵上には、弥生時代中期以来の集落ならびに墓域が存在する。奈具岡南古墳群は、その頂部に近いところにあり、奈具遺跡に臨む位置にある。この調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の奈具岡団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。『京都府遺跡地図』には、奈具岡南古墳群として1～7号墳が記載されているが、これ以外にも古墳と思われる地点があり、11号墳以下の番号を付けた。今回の造成範囲には5号墳と11～14号墳が含まれ、このうち、調査が終了した5号墳と11号墳の概要を記す。

調査概要 奈具岡南5号墳は、着手時には、山道造成によって削平された半円形のマウンドであった。試掘の結果、外護列石をもつ横穴式石室が確認され、遺物から7世紀中葉の古墳であることが判明した。墳形は、一辺7mの方墳である。石室は、一側壁の基底石が確認されたのみで、掘形から当初の石室の詳細な形態・規模を推定することはできないが、6m前後の無袖式石室の可能性がある。開口方向は、S10°Eである。副葬品には、須恵器(杯a身1)・土師器(大型碗1、暗文入りの小型碗2、赤彩高杯1)、銅心金張の耳環1がある。また、石室外から須恵器(杯a蓋1、同身1、甕1)が検出された。時期の異なるものではなく、単次葬墓の可能性がある。外護列石は、羨門に向かって右側2mを残すのみであるが、終末期古墳通有の縦積みによっている。



調査地位置図(1/25,000)

奈具岡南11号墳は、5号墳の北側50mに位置する短辺14m・長辺17mを測る木棺直葬の長方形墳である。西側は地山を削り出し、東側は約20cmの盛り土によって墳丘を造るが、盛り土部分は不整形で低い。逆に削り出し部分は、明確に墳裾を造り出し、奈具遺跡などの集落に面した側の視覚的効果を高めている。主体部は、墳丘主軸と平行に1基の木棺を直葬する。長さ7m・東側幅2.4m・西側幅2.8mを測る箱形木棺である。また、棺主軸に沿って、径20cm前後のピット2点を検出したが、これは長岡京市井の内稲荷塚古墳に



奈具岡南古墳群(1.全景、2.5号墳、3.11号墳)

あるような棺の据え付けに関連するものか。棺内には副葬遺物はなく、墓壇内の東小口側から1点の緑色凝灰岩製の管玉1点を検出した。また、墳頂ならびに墳丘斜面から土師器壺2点以上、小型丸底壺2点以上が出土しており、小型丸底壺の形態から、11号墳の築造時期を4世紀後半～5世紀前半の1点に押さえることができる。なお、土師器壺の1点は埴質の大型のものであるが、内面に火を受けた痕跡のあることが注意される。

まとめ 奈具岡南古墳群の実態は、まだ調査が始まったばかりで、不明な点が多い。この5・11号墳の成果を既往の奈具地域の古墳の調査と対比すれば、以下の特徴がある。

①5号墳は、現在、奈具地域で判明する最も新しい時期の古墳であることがわかった。竹野川右岸では、弥栄町新ヶ尾東古墳群などの横穴式石室が知られているが、7世紀以降の古墳は不明であった。5号墳は、遺存が不良であるが、単次墓室・外護列石の石積み・南開口などの点に終末期古墳の要素が指摘できる。この地域で、良好な終末期古墳の資料が蓄積されることが望まれる。

②11号墳は、大型の木棺を直葬するものの、遺物が少ない。丹後地域では、4世紀末前後の古墳に遺物が少ない傾向があるが、棺内に遺物を納めるよりも棺周辺で儀礼を行うように比重が変化したからかもしれない。奈具地域の古墳群では、奈具14号墳で棺蓋上に炭層の広がりが検出され、この奈具岡南11号墳では埴質の大型壺が内面に火を受けていたことを確認した。また、この奈具の古墳群の頭位方向は東西軸に近似する特徴がある。丹後の奈具地域の発掘事例の増加によって、この地域集団の埋葬法の変遷が一層明確となるだろう。

(河野一隆)

3. 中原城跡

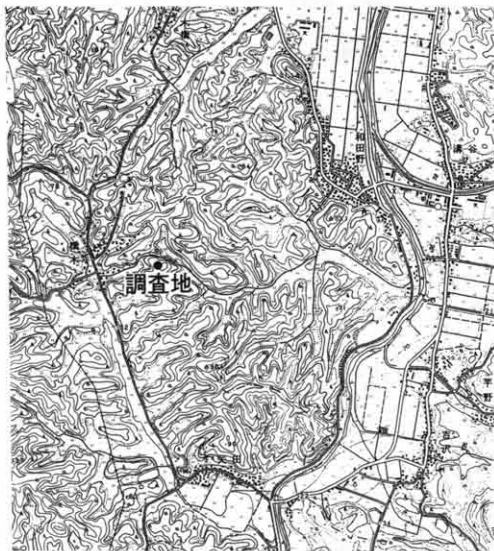
調査地 中郡峰山町字橋木
調査期間 平成7年5月23日～6月29日
調査面積 約360m²

はじめに 今回の調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国営農地開発事業に伴い、同局の依頼を受けて実施した。この中原城跡は、幅約100mほどの谷を中心にして、東西に小丘陵が樹枝状になっている地形の丘陵上平坦部に位置し、1988年度版『京都府遺跡地図』によると、中世の山城として記載されている。調査地の南西には、古墳時代後期の新蔵古墳群が存在する。

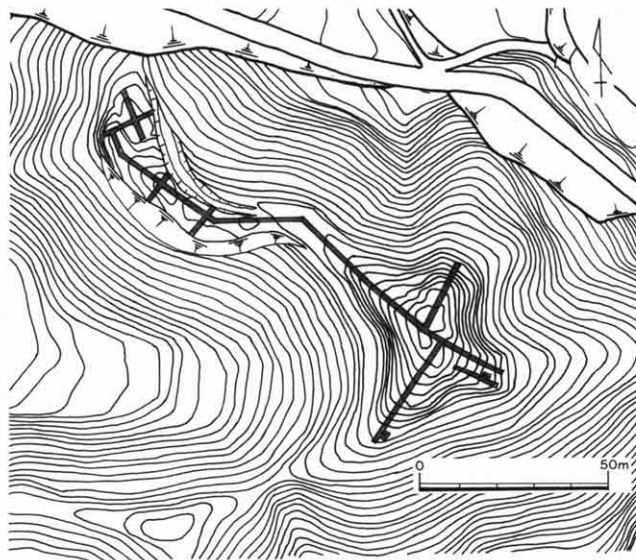
調査概要 調査は、2つの丘陵上において試掘調査を行い、遺構の確認をすることであった。丘陵上の平坦部とテラス状の平坦部に計13本の試掘トレンチを設定した。幅1.5mのトレンチを各尾根の中央に設定して調査したが、現地表から約10cmのところまで地山面を検出した。テラス部分においても、同様であった。しかし、東南の丘陵の裾部に計2基の壁面と底部が焼けた焼土坑を検出したが、遺物が出土していないため、時期については不明である。この焼土坑からも遺物は出土しなかった。

まとめ この調査地は、中原城跡という中世の山城ということで調査を行ったが、中世の山城に関連する遺構やその他の時代の遺構についても確認できず、遺物も出土しなかった。検出できたのは時期不明の焼土坑2基のみであった。今回の調査区内には中原城は存在しなかったといえる。

(村田和弘)



調査地位置図(1/50,000)



試掘トレンチ配置図

4. 京都縦貫自動車道関係遺跡(宮津工区)

所在地 宮津市大字喜多・小田地内
 調査期間 平成7年5月23日～7月12日
 調査面積 約150m²

はじめに この調査は、京都縦貫自動車道の建設に伴い、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。調査地は、宮津市の上宮津地区に所在する。そこは、大手川がつくる谷平野と、その両岸に張り出す丘陵性山地の二つの地形的特色を有する。調査地は、右岸に張り出す丘陵性山地に位置する。以下、各古墳ごとに調査の概要を記す(位置図の番号は、以下の遺跡名に対応)。

調査概要

①小田蛭子谷古墳 小丘陵性山地の先端部に位置する。調査地に十字形のトレンチを設定して掘削を始めた。トレンチ中央部で集石状遺構を検出した。石室に伴うものか確認するため精査を行ったところ、地山(花崗岩)が岩塊状に露出しているにすぎなかった。

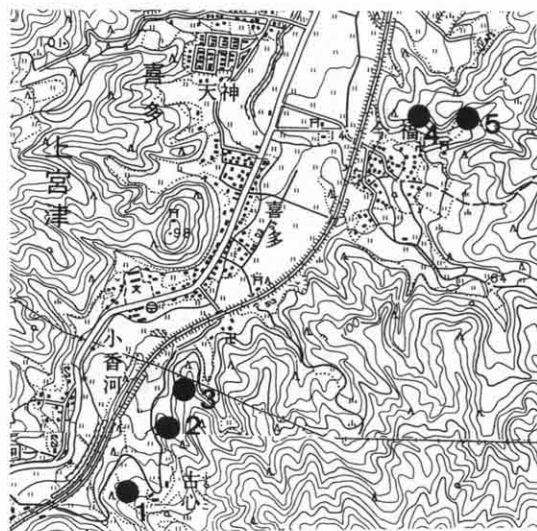
②小田大谷古墳 丘陵性山地の稜線上に位置する。比較的平坦なところに幅1m・長さ26mのトレンチを設定して掘削を始めた。主体部や周溝の痕跡はおろか一片の土器も出土しなかった。

③城山谷古墳 丘陵性山地の稜線に3か所の古墳状隆起が認められたので、それらを貫くように幅1m・長さ36mのトレンチを設定した。その結果、古墳に伴う主体部の痕跡や遺物もなかった。

④桑原口1号墳 小さく張り出した丘陵性山地の腹部に位置する。調査地は、3段の段状地形に成形されている。上段の崖付近に長さ70～80cmほどの角礫が面を揃えて置かれていた。石室に伴うものか確認するため、それに直交するように幅1mのトレンチを設定した。その結果、トレンチ内で角礫を検出したが、地山の花崗岩の一部と判断した。

⑤桑原口2号墳 丘陵性山地の先端部に位置する。まとまった平坦面に十字形のトレンチを設定して掘削を行った。表土下は、淡茶褐色砂質土・地山(花崗岩)層となる。遺構・遺物はなかった。

まとめ 以上5基の調査を行ったが、すべて古墳とは認められなかった。削平などによって古墳自体が消滅したという可能性も否定せざるを得ない。



(尾崎昌之)

調査地位置図(1/25,000)

5. 植物園北遺跡第16次

所在地 京都市左京区下鴨北芝町
 調査期間 平成7年4月19日～8月11日
 調査面積 約960m²

はじめに この調査は、京都府出納管理局による公舎整備工事に伴うもので、同局の依頼を受けて発掘調査を実施した。

植物園北遺跡は、賀茂川と高野川に挟まれた扇状地に広がる弥生時代から古墳時代の集落遺跡である。遺跡の範囲は、京都府立植物園の北側を中心とする上賀茂神社からノートルダム女子大学の東側まで、東西約2km・南北約1kmに及ぶと考えられている。この遺跡は、1979年からの公共下水道工事に伴う立会調査で遺跡の存在が知られるようになった。その後の調査で縄文時代晩期から室町時代に至る遺構・遺物が発見されている。今回の調査地は、平成5年度に当調査研究センターが調査した第13次調査地の道路を隔てた南隣りになる。第13次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴式住居跡が4基発見されている。今回の調査でも竪穴式住居跡の存在が予想されたため、公舎建設予定地域に南・北2か所のトレンチを設定し発掘調査を実施した。

調査概要 北トレンチには遺物包含層がほとんどなく、最も浅い西北端では現地表下約30cmで遺構が検出された。南トレンチには、表土の下に旧耕作土があり、その下に薄く堆積した遺物包含層の下層から遺構が検出された。これまで竪穴式住居跡6基、集石遺構1基、土坑、土器溜まり7基、柱穴群が見つかった。



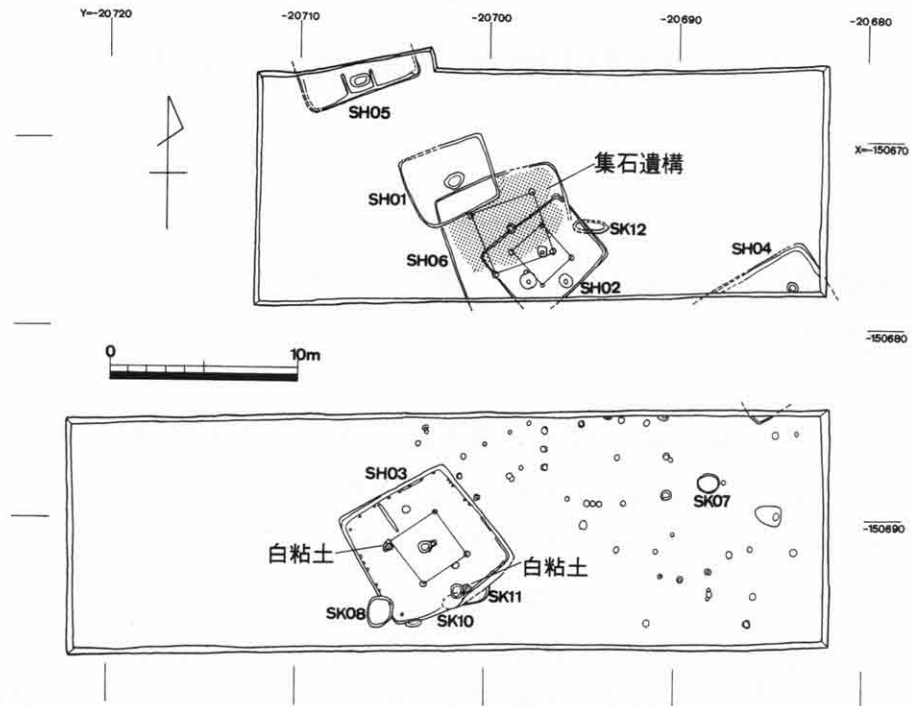
第1図 調査地位置図(1/25,000)

竪穴式住居跡SH01 一辺4～4.5mを測り、中央に炉跡と推定される凹みがある。柱穴はみられない。住居廃絶後、住居跡全体を覆うように多量の土器が投棄されていた。

竪穴式住居跡SH06 SH01に切られ、一辺6.5m前後を測る。中央で炉跡、南側で土坑(特殊ピット)、柱穴4か所などが検出された。住居の廃絶後に、住居跡のほぼ全域に集石遺構が造られている。

集石には投棄されたときに割れたものがある。石の間には、全域で土器が混じり、西北隅には土器溜まりが確認されているので祭祀が行われた可能性がある。

竪穴式住居跡 S H 02 S H 06 に切れ、一辺 4.2~5.4m・深さ約35cmを測



第2図 遺構平面図(1/400)

る。中央で炉跡、南辺沿いで土坑、柱穴4か所が検出された。周壁溝がめぐる。

竪穴式住居跡 S H 03 南トレンチで検出された。一辺6.3~7m・深さ約25cmを測る。周壁溝がわずかに残存し、壁沿いに幅10cm前後の柱穴と推定される小ピットが見つかった。これは、壁板を支持するために設けられたと推定される。中央と北側で焼土、南辺沿いで土坑、柱穴4つが検出された。北西の柱穴と土坑の隣りに白粘土が置かれていた。

竪穴式住居跡 S H 04 北トレンチの東南隅で検出された。幅20cm・深さ10cmの周壁溝がめぐる。

竪穴式住居跡 S H 05 北トレンチ西南隅で検出された。一辺約6.2mを測る。西・南辺に周壁溝が残存し、南辺の周壁溝に直交する浅い溝2条が取り付く。その浅い溝に挟まれて土坑が検出され、土器がまとまって出土している。

土坑 S K 01~11からは、多くの土器が出土した(布留式期併行・中頃)。南トレンチの柱穴群は、建物跡にまとまるものはないが、S H 03に平行する柱穴があり、わずかに出土する土器も S H 03 とほぼ同時期のものである。

まとめ 今回の調査は、以下のようにまとめられる。

- ①植物園北遺跡の集落の一部を検出した。竪穴式住居跡の築造時期は、弥生時代後期末(庄内期)から古墳時代初頭(布留式期)と考えられる。住居跡の切り合い関係・方位と出土遺物から、S H 02→S H 06・S H 03・S H 04→S H 05・S H 02と変遷したようである。
- ②北トレンチでは、砂礫層を掘り込んだ住居跡が多く、先に造られた住居跡は粘質土層面を選んでいるような傾向がみられる。何らかの区画が存在したのかもしれない。
- ③S H 03で壁沿いに壁板を止めた杭跡と推定されるものが検出されるなど、貴重な資料が得られた。

(石尾政信)

6. 長岡京跡左京第353次(7ANFIR-2・FDN)

所在地	向日市上植野町池ノ尻・大門
調査期間	平成6年11月7日～平成7年2月27日、平成7年4月24日～同年5月19日
調査面積	約1,980m ²

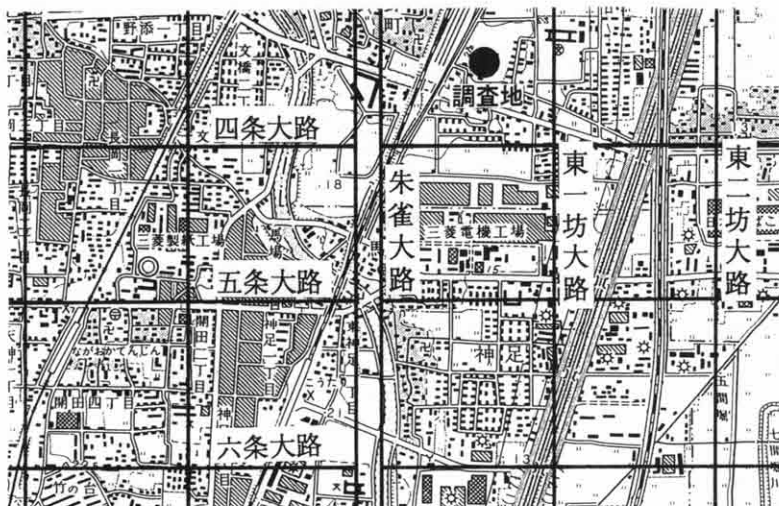
はじめに 長岡京跡左京第353次調査は、京都府土木建築部が施工する府営上植野団地建設に伴う事前調査として、同部の依頼を受けて実施した。調査地北方の左京第252次調査では、長岡京期の東一坊坊間東小路の側溝や平安時代の掘立柱建物跡・流路などが検出されており、当該地でも関連する遺構・遺物の検出が予想された。

なお、後述する四条条間小路と東一坊坊間東小路の交差点部分については、今年度の調査であるが、昨年度の調査で検出した東一坊坊間東小路の西側溝(S D 35313)と東側溝(S D 35314)の南延長部分の検出が予想されたため、左京第353次調査として遺物の取り上げなどの作業を行った。

調査概要 調査地は、長岡京跡左京四条一坊十町・十一町・十四町・十五町(旧左京三条一坊十二町・十三町、左京四条一坊九町・十六町)推定地にあたり、東一坊坊間東小路(旧東一坊第二小路)と四条条間小路(旧三条大路)の交差点にあたる。以下、主要遺構について概観しておきたい。

東一坊坊間東小路・西側溝 S D 35313 最大幅は約1.5mを測り、深さは、0.2～0.3mを測る。基本的には南流しているが、トレンチ南端では、ゆるやかな傾斜になる。溝の中心座標は、Y=-26,453mである。西側溝は、四条条間小路の交差点部分においても断絶することなく南進していることを確認しているが、トレンチ南端では、溝の輪郭は、不明瞭になる傾向がある。概して、東側溝よりも良好な遺存状況を呈しており、平安時代に掘り直された可能性がある。

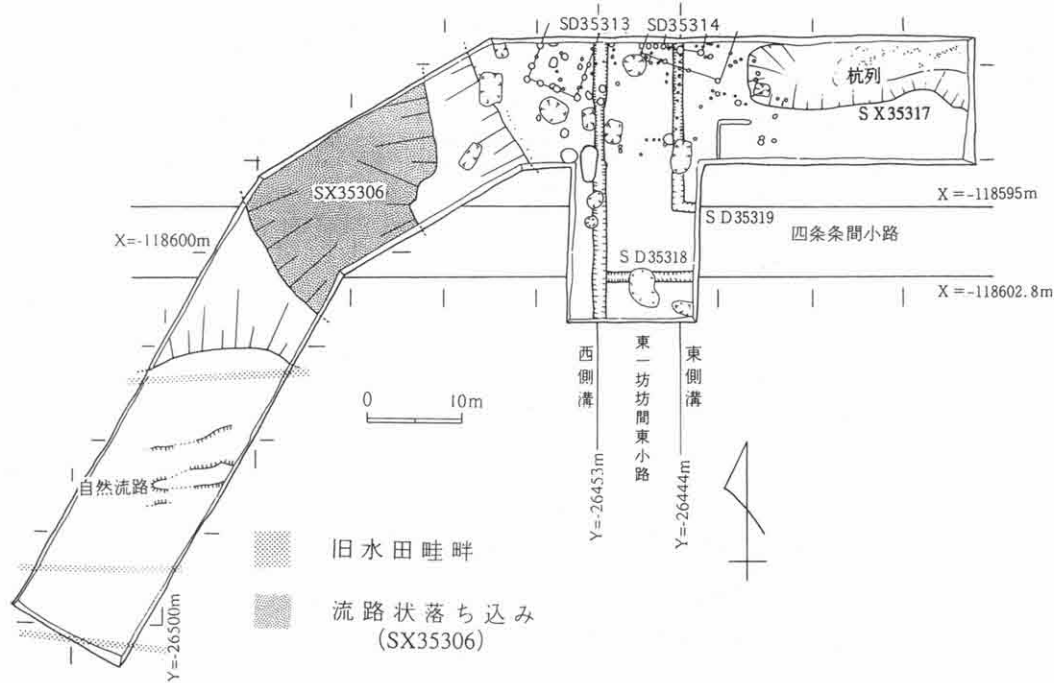
東一坊坊間東小路・東側溝 S D 35314 検出した溝幅は約1.2mを測り、深さは0.1m前後である。



第1図 調査地位置図(1/50,000)

る。溝の中心座標は、Y=-26,444mである。四条条間小路の北側溝(S D 35319)と交差し、以南には掘り込まれていない。また、交差点部分では、四条条間小路・南側溝(S D 35318)以南においても検出し得なかった。

四条条間小路・北側溝 S D 35319 東一坊坊間東小



第2図 トレンチ遺構配置図

路・東側溝と交差する部分から東進している。基本的な溝幅は、約1.1mであり、深さは約0.1mと浅い。中心座標はX=-118,595mである。

四条条間小路・南側溝 S D 35318 東一坊坊間東小路・西側溝と交差する部分を起点に東進する。溝幅は約1.1mで、深さは0.2~0.3mを測る。溝の中心座標は、X=-118,602.8mを測る。

池状落ち込み S X 35306 トレンチの屈曲部で北西から南東方向の広がりを確認した。検出した落ち込みの幅は、ほぼ15mを測り、最下層には、植物遺体を多量に含む暗茶褐色粘土が堆積している。この堆積層からは、長岡京期の土器・木製品・木簡などが出土しており、肩部附近からは、平安時代の土器・瓦も多量に出土している。なお、この粘土層直上には、礫などを充填した平安時代の整地層が堆積しており、生活空間の拡張を目的としたと考えられる。

落ち込み S X 35317 トレンチの東半部で検出した落ち込みで、埋土の状況から堆積土上半は、人為的に整地されたと考えられる。また、落ち込み内には、落ち込みの主軸ラインに沿って杭が6列打ち込まれており、護岸を目的にした可能性が高い。出土遺物には、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などの土器類のほか、下駄・箸・調度品・檜皮などの木製品、吉志部瓦窯産の軒丸・軒平瓦、小型軒瓦などがある。その多くは、平安時代前期に比定できる。その他、平安時代の掘立柱建物跡や中世の掘立柱建物跡・素掘り溝などを検出した。なお、今までの資料では、略号を「SR」と報告したが、本稿をもって「SX」に改めておきたい。

まとめ 今回の調査では、四条条間小路と東一坊坊間東小路の交差点の変則的な状況を確認できた。特に、四条条間小路が東一坊坊間東小路・西側溝以西に敷設されていないことは、西方に広がる池状落ち込み(S X 35306)の存在と深く関連するものであり、周辺の地形を含め、条坊施工の実態を把握する上で重要な所見を得たといえよう。

(小池 寛・竹下士郎)

資料紹介

平安京跡出土の中国製男子像について

小池 寛

1. はじめに

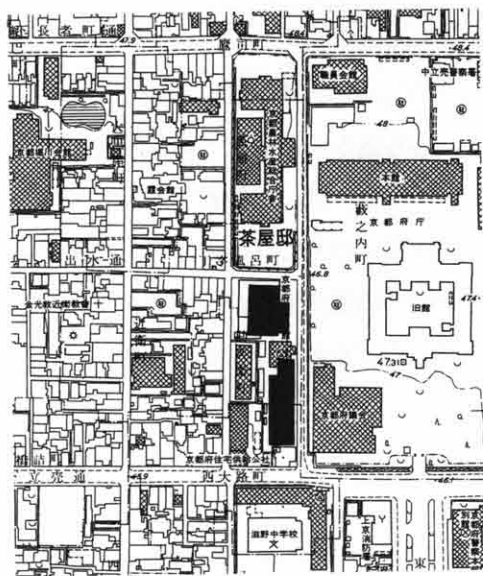
794年に平安遷都が行なわれて以後、現在に至るまで「京」には、連綿と人々が生活を営み続けている。その間、大火にみまわれ、あるいは、洪水、そして戦乱の舞台にと常に歴史の表舞台としての役割を果たして来た。また、歴史書に記載されている事件の多くが「京」を舞台にくり広げられており、極めて著名な歴史上の人物が活躍した舞台でもあった。

その「京」の考古学的調査は、実に多くの件数を数えるに至っており、今までに知られている歴史的事実を傍証したり、また、極めて微細な歴史を復元する際に有効な成果を提示している。

「京」は、また、今までの歴史の中で、常に中核的役割を果たしてきた都市であり、伝世品や発掘調査の出土品などに、数多くの舶載品が見られる。本稿で取り扱う中国製の三彩男子像も、そのような地理的・歴史的な環境の下で当該地に舶載された品である。

一方、さらに出土地を詳細に見た場合、現存する古地図などから周辺にどのような人物が居を構えていたかが理解でき、周辺から出土する遺物が、単なる出土品ではなく、どのような経過で当該地へもたらされたのかが浮かび上がって来るのである。本稿は、中国製男子像の事例報告を

中心とするが、その男子像がはるか大陸から海を渡り、当該地へもたらされたルート及び状況を推察することも1つの大きな目的でもある。



第1図 調査地位置図(1/5,000)

2. 中国製男子像の出土した環境

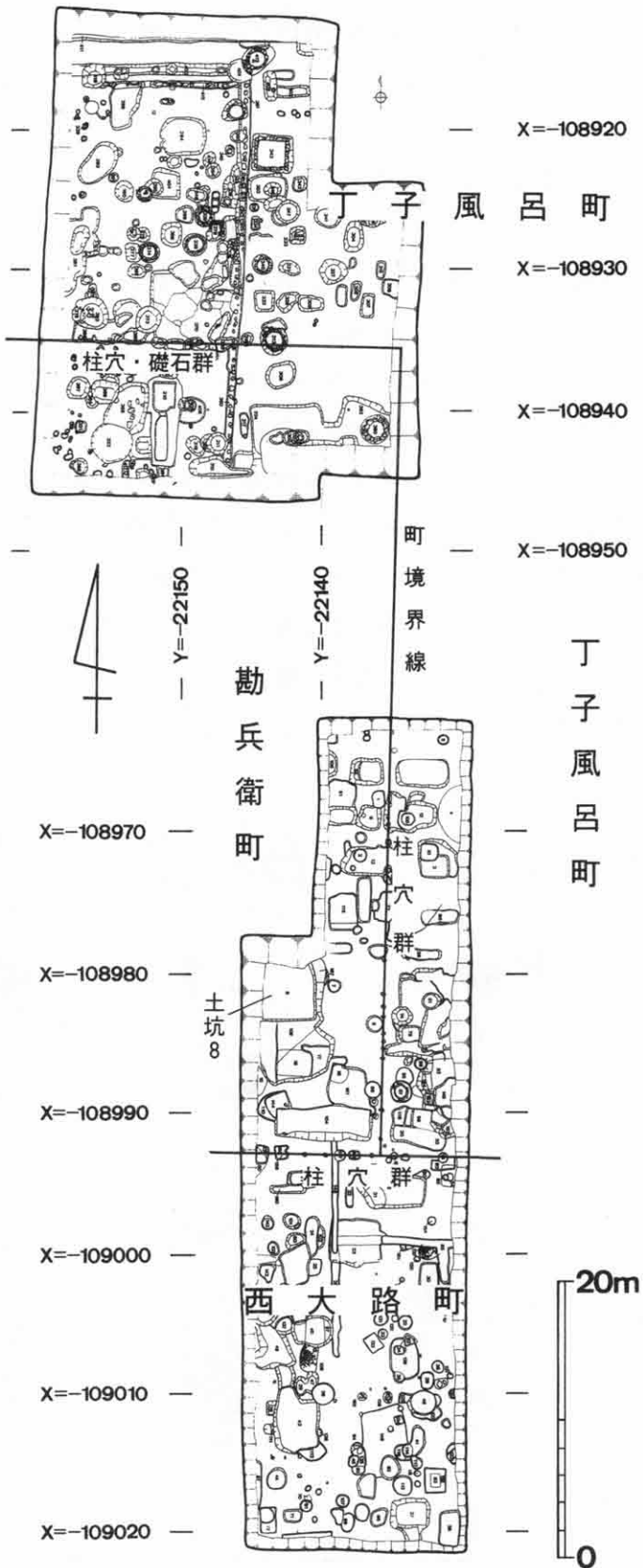
中国製男子像が出土した調査地は、平安京跡左京一条二坊十四町に位置する。江戸時代の『大内裏圖考證』では、当該町に東獄・囚獄司が推定されている。当該町における考古学的調査は、今回の調査が初めてであったが、推定される東獄・囚獄司の存在を積極的に支持するには至らなかった。しかし、大量の平安時代の土器群と軒丸瓦・軒平瓦、平瓦、丸瓦、富寿神宝などの銭貨が出土している。中でも、緑釉陶器・灰釉陶器

の出土比率は高く、その点について言えば、東獄・囚獄司の存在は全く否定されるものではないと考えられる。

当該地における東獄・囚獄司あるいは、それに類する性格をもつ施設の存在は、数々の文献に記載があり比較的、細かく施設の動態が把握できる。それらの文献から室町時代中ごろまでは、機能していたと考えて良い状況にある。それ以後、応仁の乱等の戦乱を経て、当該地の土地利用については、不明な点が多いが、当該地から出水通りをはさんで北隣接地には、京の豪商で著名な茶屋四郎次郎邸が所在しており、一帯が単なる小区画の町家ではなく、比較的広い区画を有した邸が所在した可能性が高い。

中国製男子像が出土した地点は、特定の土坑や井戸などの遺構ではなく、包含層からである。この包含層には、16世紀末から17世紀前半の土師器や陶磁器類を多く含んでおり、特に、華南三彩盤の出土は注目される。出土状況からその整地土が堆積した経過を明らかにすることはできないが、近隣に原籍があったと仮定し、推測の域を出ないが、一定の解釈を行ないたい。その推論を進める上で重要な遺構が、土坑8である。

土坑8は、町屋が集中する京都にあって、一辺10mを測る大土坑である。坑内から多量の陶磁器類の他、漆器、箸、調度品などが出土している。土坑底部及び壁面が直角を呈し



第2図 検出遺構と町境界

ていることから、当初は石室等の機能を有していたと考えられ、その機能が失われた段階で、廃棄物等を投棄するゴミ穴として徐々に埋められていったと考えられる。

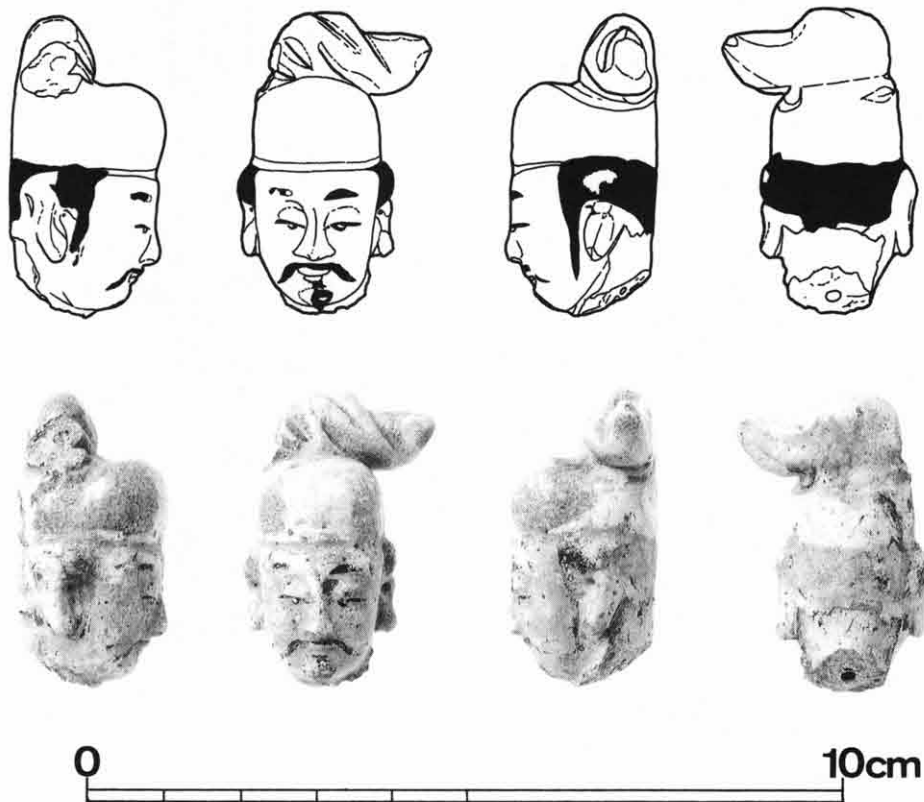
検出した遺構群は、極めて複雑であり、町割を正確に復元できないが、いずれにしても当該地及び周辺一帯には、規模の大きい邸が存在していたと考えられる。

3. 中国製男子像について

出土した男子像は、頸部以上の残存であり、胴体部以下は欠損している。顔面及び後頭部は無釉であるが、頭部と衣服の襟の部分に三釉が見られる。顔は、目・鼻・口唇を立体的につくり出した上に、眉・目・髭・顎髭を墨書にて描いている。また、側頭部及び後頭部には、墨書にて髪を表現している。前頭部の突出度は高く、頭頂部には、布を巻き込んだような冠帽が見られる。頭部には、鮮やかな緑色の釉を塗布し、布状の巻き込みには、褐色と黄色の釉を塗布している。また、前頭部と額の間には、焼成後に赤色顔料で描かれた区画線が見られる。

一方、頸部下部が欠損しているが、衣服の襟部には、前頭部と同じく鮮やかな緑色の釉が見られる。なお、頸部の破面中央には、直径2mmの円孔が見られる。これは、全身を製作する際に芯棒をさし込んだ跡であり、小型の男子像や俑を製作する技法を知る上で、好資料である。

一般に、唐三彩・俑の胎土は軟質であり、乳白色を呈している。日本での出土としては、藤原京跡において一例出土しているに過ぎない。しかし、厳密に言う「俑」の概念は、墳墓の副葬用



第3図 男子像実測図(L.N.49周辺)

であり、唐代においては国が管理することから、国外への流出は、極めて希有である。藤原京跡の出土例は、そのような条件下において国家間の文物交流を示唆している可能性があるが、従前から認識されているように「俑」として国内に持ち込まれたかについては、再考を要する。

一方、唐代の俑及び像の基本的特色としては、冠帽の前頭部は、あまり突出せず、また、衣服の襟部分と頸部には、一定の間隔があく傾向がある。

当該男子像は、前頭部が突出し、胎土が堅緻で淡茶褐色を呈する。そして、頸部に接するように衣服の襟部分が位置していることから、唐代の俑及び像とは異なる。また、同地点から出土している華南三彩盤と釉調が酷似することから、明代の男子像としての特色を有している。

4. 中国製男子像出土の意味

現在、日本において明代に比定できる中国製男子像及び女子像の出土例は、確認されていない。ここでは、当該地で出土した必然性について推測の域を出ないが言及し、結びとしておきたい。

先述したように、当該地から出水通りをはさんだ隣接地には、豪商で著名な茶屋四郎次郎邸が所在しており、現在の町名も「茶屋町」となっている。茶屋四郎次郎は、日明貿易において活躍した人物で、特に、琉球貿易において財を成し、政治的にもその地位を確保した人物である。その琉球貿易において男子像が、中国・明から日本に輸入され、茶屋邸にもたらされたことは、消極的ではあるが肯首できる。

茶屋邸の南方には、現在、丁字風呂町・勘兵衛町・西大路町の三町が位置している。各々の町割の境には、発掘調査によって柱穴列が一条並んでおり、明確に時期を設定できないが、確実に江戸時代にはさかのぼる町割が存在したことが確認できる。特に、勘兵衛町の町名起源は、『京都叢書』によると、「京の富者、三勘兵衛」の一人が、この周辺に居住していたことと関連があるらしく、時期的には、16世紀末から17世紀前半に比定できる。

同時期には、茶屋四郎次郎が活躍しており、両者は、隣人同士で親交を深めていたことが想像できる。おそらく、琉球貿易によって茶屋邸に持ち込まれた男子像は、何らかの贈答品として「勘兵衛」にわたり、歳月を重ね、当該地に埋没したと仮定することも、可能ではないだろうか。

なお、琉球貿易によって、沖縄のグスク関係遺跡からの出土は、現時点では見られないことを高宮廣衛先生・金武正紀氏からご教示を得た。貿易の窓口である沖縄でさえも出土していないことを考えると、広範囲の地域から出土する遺物ではなく、出土地については、必然性をもっている可能性が高い。今後、歴史的背景を十分考慮し、類例の集成を行う必要がある。

今回の男子像の出土は、当該地周辺地域の歴史的環境を如実に示す事例として注目できる。可能性を拡大解釈した側面もあるが、今後の類例に期したい。

本稿作成にあたり、金関 恕先生・高宮廣衛先生・近江昌司先生をはじめ、金武正紀氏・黄曉芬諸氏の御教示を得た。感謝致したい。なお、本調査は、当調査研究センター刊行の『京都府遺跡調査概報』第63冊に報告しており、詳細は参照して頂きたい。

(こいけ・ひろし＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

府内遺跡紹介

67. 嵯峨院跡

嵯峨院跡は、京都市右京区嵯峨大沢町に所在し、現在は大覚寺として知られている寺院内にある。この大覚寺は、元来は嵯峨天皇の後院であった嵯峨院に由来する。

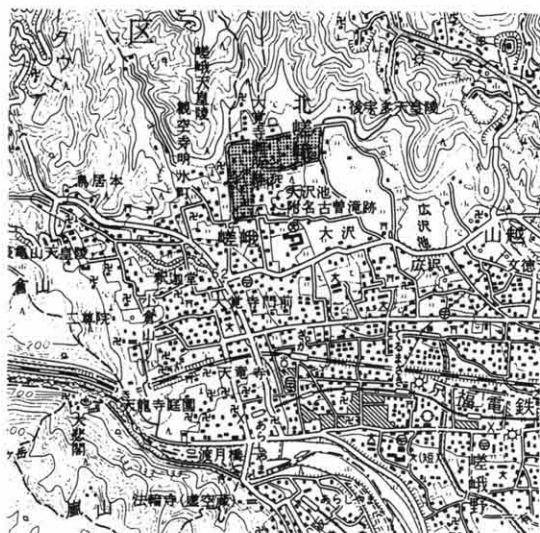
嵯峨院は、史料上では、『日本後紀』弘仁5(814)年閏7月27日条に、「辛丑、遊獵北野、日晚御嵯峨院、賜侍臣衣被」とあるのが初見である。この時は、嵯峨天皇が北野で獵を行い、夜に嵯峨院へ立ち寄っているのであるから、嵯峨朝の早い段階で嵯峨院が離宮として設けられていたことがわかる。したがって、初めから後院として設けられたのではなかったのである。元来、嵯峨天皇と嵯峨の地の結びつきは古く、まだ親王時代のことではあるが、嵯峨院の初見よりも古い時期の延暦21(802)年8月8日に、的野で遊獵したときに嵯峨荘に立ち寄ったことが史料に見えている(『類聚国史』巻32)。

ところで、嵯峨天皇は、皇太弟の太皇親王に譲位した後、平安宮から出て、冷然院(冷泉院)へ居を移している。それまでの太上天皇は、基本的には天皇と同じ宮内に居住していた。嵯峨太上天皇にいたって、譲位後は別の居所を設けて移り住むのが先例となっていたのである。むろん、このような御所を後には後院と呼ぶようになったが、嵯峨の時代にはまだ完全に恒例化されたものではなかった。

嵯峨太上天皇が初めに入ったのは冷然院であり、『日本紀略』などの史料上では嵯峨のことを冷然院として出てくる。嵯峨は、ここで淳和朝一代を過ごしており、正月には娘で淳和天皇の皇后

である正子内親王に会っている。天皇が正月に譲位した太上天皇のところへ行く朝覲行幸は次の仁明朝以後に見えるが、この行事がまだ成立していない段階で、このような事実のあったことは注目すべきことである。

ところで、嵯峨は、仁明天皇即位後にあたる承和元(834)年8月9日に嵯峨院に移っている。それよりも6日前にそれに伴う宴会があり、その『続日本後紀』の条文には「太上天皇及太皇太后将遷御嵯峨新院」とあり、嵯峨院へは夫人の壇林皇后橘嘉智子とともに入っていることがわかる。おそらく、嵯峨は、夫妻で居住したのであろう。嵯峨院の方は、10月7日条に、「甲



遺跡所在地(1/50,000)
範囲は『京都府遺跡地図』から

申、嵯峨院寝殿新成、今上遣使奉獻、以賀之」とあるように、寝殿が完成し、承和元年中には太上天皇の御所としての体裁は整ったとみられる。また、貞観5(863)年正月3日条の源定の薨伝には、「始太上天皇遷御嵯峨院之時、爲築別宮、令爲居処、号曰小院、太上天皇所居爲大院」とあって、嵯峨の居所とした建物以外に、小院と呼ばれる建物のあったことが知られる。さらに、貞観15(873)年8月28日条の橘貞根の卒伝に、「常侍嵯峨南北兩宮」ともあるので、南北兩宮と称する殿舎の存在が推定できる。

承和～嘉祥年間の朝覲行幸表

番号	年次	西暦	場所	朝覲の相手
1	天長10.8.10	833	冷然院	先太上天皇及太皇太后
2	承和元.1.2	834	淳和院	後太上天皇
3	承和元1.4	834	冷然院	先太上天皇及太皇太后
4	承和2.1.3	835	嵯峨院	先太上天皇及太皇太后
5	承和3.1.3	836	嵯峨院	先太上天皇及太皇太后
6	承和4.1.3	837	嵯峨院	先太上天皇及太皇太后
7	承和5.1.3	838	嵯峨院	先太上天皇及太皇太后
8	承和6.閏1.2	839	嵯峨院	先太上天皇及太皇太后
9	承和6.8.1	839	嵯峨院?	先太上天皇の不予による
10	承和6.8.4	839	嵯峨院?	先太上天皇の不予による
11	承和7.2.2	840	嵯峨院	先太上天皇及太皇太后
12	承和9.1.3	842	嵯峨院	先太上天皇及太皇太后
13	承和11.1.3	844	冷然院	太皇太后
14	承和13.1.3	846	冷然院	太皇太后
15	承和14.1.3	847	冷然院	太皇太后
16	嘉祥3.1.3	850	冷然院	太皇太后

嵯峨は、ここで嘉智子とともに崩御するまで仁明天皇から朝覲行幸を受けている。付表にあるとおり、『続日本後紀』にはほぼ毎年、朝覲行幸が記録されているが、このことが先例となつて正月3日に先帝に対する朝覲行幸が恒例化していくのである。

ところで、嵯峨太上天皇が崩御してまもなく承和の変が起こり、皇太子が廃されるが、その同年中の承和9(842)年12月3日には嘉智子太皇太后は冷然院へ移っている。これ以後、嘉智子は冷然院で仁明天皇から朝覲行幸を受けている。嘉祥3年には仁明天皇と嘉智子太皇太后が続けて崩じているので、文徳天皇の冷然院への朝覲行幸は見られない。

そうすると、嵯峨の崩御後、嘉智子が冷然院へ移ってからの嵯峨院はどうなったのであろうか。その後の嵯峨院の状況を示す具体的な史料がないため、詳しくはわからないが、『三代実録』貞観18(876)年2月25日条に、「淳和太皇太后、請以嵯峨院爲大覺寺曰、嵯峨院者、太上天皇昔日閑放之地也、(中略)比年頗加修葺、僅避風雨(後略)」とあり、淳和太皇太后の正子内親王が嵯峨院を大覺寺という寺院にするよう清和天皇に請願している。結局、この請願が認められて嵯峨院は正式に大覺寺となるが、ここではその請願を正子が行っている点に注意しておきたい。

『三代実録』元慶3(879)年3月23日条の崩伝によれば、正子は、嵯峨と嘉智子の娘で淳和天皇の皇后となるが、承和の変で正子の実子である恒貞親王が皇太子を廃せられると、母親の嘉智子を怨んだと書かれている。すると、嵯峨院は、嵯峨太上天皇と嘉智子太皇太后の死後、実子の正子内親王が伝領した可能性が出てくる。正子自身は、淳和太上天皇の崩御後は淳和の後院である淳和院に引き続いて居住している。したがって、たとえ、嵯峨院を伝領していなくても、その処分については何らかの影響を与える立場にいたことだけは認めてよからう。正子太皇太后のこの嵯峨院を寺院にする行為は、貞観16(874)年の淳和院の焼亡や、同18(876)年の冷然院の焼亡と関係があるようである。この相次いだ後院の焼亡が正子を動かしたと見ることも、それほど誤っ

たこととは言えまい。

このように、貞観18年を境にして嵯峨院は大覚寺という寺院になってしまい、現在にまで至っている。したがって、かつての嵯峨院の遺構は、現在も大覚寺の地下遺構として存在しているのである。この地の発掘調査は、1976年の大日堂・聖天堂の移築に伴って実施されたのがはじめである。この時は、中世の石敷き遺構や、平安時代中期の石垣・庭園遺構などが見つかっている。なかには、「大井」や「大井寺」などと陽刻された軒平瓦も出土している。

その後、1984年には大沢池の整備に伴い、大沢池の北岸部分で発掘調査が実施されている。この時の調査で、嵯峨院の庭園遺構である「名古曾滝」や遣り水遺構が見つかっている。この遣り水遺構は、幅約10mの規模を持っていたことが確認されており、これが造られた当時はかなりの水量があったことが推定されている。

さらに、同じ1984年に水道管敷設工事に伴って行われた立会調査では、大覚寺の北方で流路状遺構が検出されている。規模も幅約10m・深さ50cmとかなりあり、しかもこの流路から出土した遺物は、嵯峨院の時代のもので、出土地点も「名古曾滝」の北側の地区に当たっていることから、「名古曾滝」へ水を供給した水路ではないかと推定されている。

このように、嵯峨院の調査は始まったばかりであり、後院のはしりとしての構造上のことや、庭園遺構と行った後世の後院のあり方を考える上で重要なことは、まだほとんど解明されていないのが現状である。今後の発掘調査の進展が待たれる。

(土橋 誠)

<参考文献>

『京都の歴史』第1巻 京都市 1970

橋本義彦「後院について」(『平安貴族社会の研究』 吉川弘文館) 1976

『史跡大覚寺御所跡発掘調査概報』 大覚寺 1986

鈴木景二「日本古代の行幸」『ヒストリア』第125号 1989.12

仁藤敦史「古代国家における都城と行幸—「動く王」から「動かない王」への変質—」『歴史学研究』第613号 1990.11

仁藤敦史「古代王権と行幸」(黛 弘道編『古代王権と祭儀』 吉川弘文館) 1990

澤木智子「日本古代における留守と行幸—従駕形態との関連から—」『ヒストリア』第132号 1991.9

瀧浪貞子「葉子の変と上皇別宮の出現—後院の系譜(その1)—」、「奈良時代の上皇と「後院」—後院の系譜(その2)—」(同『日本古代宮廷社会の研究』所収 思文閣) 1991

『嵯峨御所大覚寺の名宝』 日本経済新聞社 1992

『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告書』 大覚寺 1993

長岡京跡調査だより・54

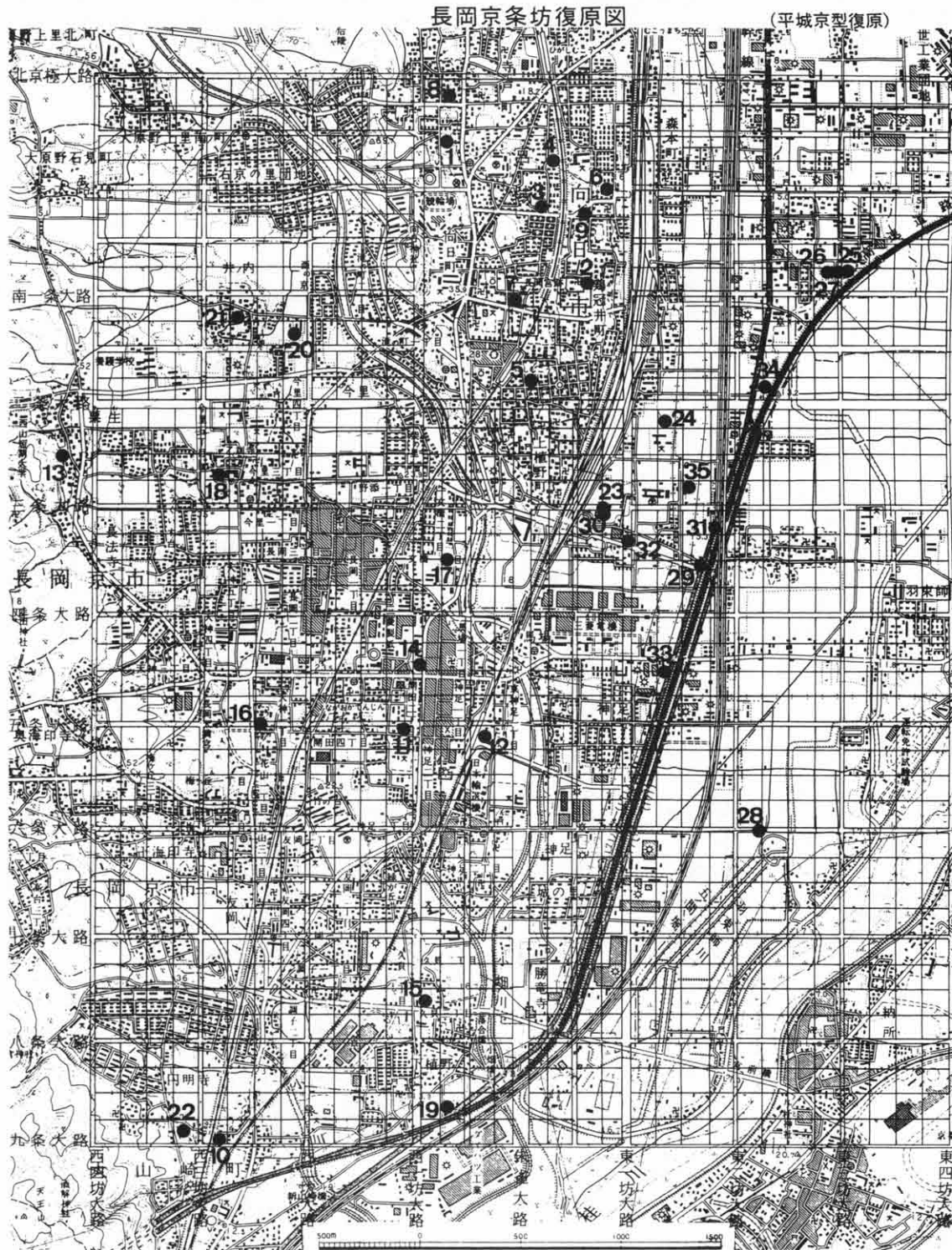
前回の「たより」以降の長岡京連絡協議会は、平成7年5月24日、6月28日、7月26日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は、宮内9件、右京域13件、左京域13件であった。京外の5件を併せると40件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。この内、主要な報告について調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1995年7月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第295次	7ANBMC-3	向日市寺戸町南垣内8-2他	(財)向日市埋文	3/2~9/30
2	宮内第299次	7ANEOK	向日市鶏冠井町御屋敷29-2	(財)向日市埋文	4/17~6/23
3	宮内第300次	7ANDTR	向日市森本町天神森4-13他	(財)向日市埋文	5/8~5/16
4	宮内第301次	7ANBKT	向日市寺戸町岸ノ下16-1	(財)向日市埋文	5/10~7/22
5	宮内第302次	7ANFMK-4	向日市上植野町南開8-3	(財)向日市埋文	5/29~6/16
6	宮内第303次	7ANDST	向日市森本町下森本24-91他	(財)向日市埋文	6/13~6/30
7	宮内第304次	7ANEHJ	向日市鶏冠井町祓所41-14	(財)向日市埋文	6/19~6/30
8	宮内第305次	7ANBNC	向日市寺戸町中垣内3	(財)向日市埋文	6/26~7/20
9	宮内第306次	7ANDYK	向日市森本町山開3	(財)向日市埋文	7/12~7/26
10	右京第491次	7ANSTD	大山崎町円明寺佃12・15	大山崎町教委	3/14~8/4
11	右京第493次	7ANKST-6	長岡京市開田二丁目213他	(財)長岡京市埋文	4/10~5/11
12	右京第494次	7ANMWY-6	長岡京市神足一丁目602-7	(財)長岡京市埋文	4/18~
13	右京第495次	7ANHBB-3	長岡京市粟生弁天芝2-1	(財)長岡京市埋文	4/24~5/9
14	右京第496次	7ANKKC-2	長岡京市開田一丁目18	(財)長岡京市埋文	5/16~7/14
15	右京第497次	7ANQMZ-3	長岡京市久貝二丁目508-1	(財)長岡京市埋文	6/5~6/22
16	右京第498次	7ANKNZ-8	長岡京市天神一丁目	(財)京都府埋文	6/5~8/
17	右京第499次	7ANISD	長岡京市一文橋一丁目102-1	(財)長岡京市埋文	6/7~7/18
18	右京第500次	7ANINC-6	長岡京市今里五丁目325-1他	(財)長岡京市埋文	6/26~
19	右京第501次	7ANTSE	大山崎町下植野山王前17	大山崎町教委	6/15~7/4
20	右京第502次	7ANGSN-3	長岡京市井ノ内下印田24-1	(財)長岡京市埋文	7/5~8/8
21	右京第503次	7ANGKS-3	長岡京市井ノ内小西40	長岡京市教委	7/21~8/18
22	右京第504次	7ANSTK-2	大山崎町円明寺大門脇2・3	大山崎町教委	7/18~8/25
23	左京第353次	7ANFIR-2・FDN	向日市上植野町池ノ尻・大門	(財)京都府埋文	4/24~5/19
24	左京第356次	7ANFGB-3	向日市上植野町五ノ坪1-2他	(財)向日市埋文	1/10~6/30
25	左京第361次	7ANVKN-6	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~2/末
26	左京第362次	7ANVKN-7	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~2/末
27	左京第363次	7ANVKN-8	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~2/末
28	左京第364次	7ANYNO-2	京都市伏見区淀樋爪町地内	(財)京都市埋文	4/1~11/30
29	左京第365次	7ANFMI-6	向日市上植野町南淀井8-5	(財)向日市埋文	5/15~5/26
30	左京第366次	7ANFIR-3・FDN-2・FKA・FHM-6	向日市上植野町池ノ尻、大門、釜桂、樋爪	(財)京都府埋文	5/22~1/
31	左京第367次	7ANFWD-6	向日市上植野町脇田6	(財)向日市埋文	5/29~7/14
32	左京第368次	7ANFOR-7	向日市上植野町落堀17-1	(財)向日市埋文	6/5
33	左京第369次	7ANLRB-4	長岡京市馬場六ノ坪12他	(財)長岡京市埋文	7/5~8/4
34	左京第370次	7ANEKZ-9	向日市鶏冠井町清水9	(財)向日市埋文	6/30~8/28
35	左京第371次	7ANFOT-10	向日市上植野町脇田6	(財)向日市埋文	7/24~8/10

36	中海道遺跡第31次	3NNANK	向日市物集女町ヲサン田6他	(財)向日市埋文	7/18~10/31
37	遺跡確認第21次	7XYS' HK	大山崎町大山崎傍示木9-1	大山崎町教委	7/14~8/11
38	山城国府跡第35次	7XYS' FH	大山崎町大山崎藤井畑17	大山崎町教委	5/23~6/6
39	山城国府跡第36次	7XYS' FH	大山崎町大山崎藤井畑41-1	大山崎町教委	7/10~7/14
40	山城国府跡第37次	7XYS' AS	大山崎町大山崎明島1	大山崎町教委	7/17~8/11



▽番号は一覧表・本文()内と対応

調査地位置図

右京第503次(21)
井ノ内稲荷塚古墳

長岡京市教育委員会・大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団

長岡京市井ノ内小西40にある前方後円墳。1993年(第1次)、1994年(第2次)に続き今回は、第3次の調査である。石室の規模は、全長10m以上、玄室規模は長さ4.4m・幅1.8m、床面での推定玄室長約5m・同幅約2.5mに達することが明らかになった。これは、確認されているものの中では山城地方でも10指に入る大型石室である。築造時期は、クビレ部より検出された須恵器の年代を参考にすると、6世紀中頃(TK10型式期)と考えられる。これらのことから、稲荷塚古墳は、向日市物集女車塚古墳に並ぶ桂川右岸の乙訓地方最古のものであり、石室規模の点でも、物集女車塚古墳に匹敵するものとなる可能性があり、同時期における乙訓地方最大級の横穴式石室となる。このように、物集女車塚古墳と墳丘規模、石室規模、築造時期がほぼ同じであることが判明したわけで、今後、両者の共通点・相違点についての比較研究が待たれる。

左京第356次(24)

(財)向日市埋蔵文化財センター

左京三条二坊六町のこの調査では、六町南部が掘立柱建物跡、柵、井戸、池状遺構で構成される特殊な宅地利用であったことが判明した。また、舟形木製品、呪符木簡、人形、墨書人面土器などの祭祀遺物が集中して出土した。とりわけ、舟形木製品が呪符木簡や土師器高杯と一緒に祭祀道具として使われたと推定されることは、祭祀具の具体的な使用法とその意味を考える上で重要な成果となった。

(古瀬誠三)

参考資料：『井ノ内稲荷塚古墳第3次調査現地説明会資料』(長岡京市教育委員会・大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団、1995)

『長岡京跡左京第356次調査 現地説明会資料～左京三条二坊六町、三条条間南小路・東二坊坊間小路交差点(7ANFGB-3)発掘調査～』(向日市埋蔵文化財センター、1995)

センターの動向(7.5～7)

1. できごと
5. 2 奈具岡北古墳群(弥栄町)発掘調査開始
- 9 宮川遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 15～16 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於:大阪市)城戸事務局長、安田課長補佐出席
- 16 職員研修—人骨調査について—講師:石崎善久調査員
- 17～26 国際協力事業団(JICA)研修生、当センターで研修
- 19 遠所古墳群(網野町)発掘調査開始
- 20～21 日本考古学協会総会(於:平塚市東海大学)伊野係長、松井主任調査員・竹井調査員出席
- 23 福山敏男前理事長告别式
中原城跡(峰山町)発掘調査開始
城山谷古墳群(宮津市)発掘調査開始
- 24 長岡京連絡協議会
- 26 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於:京都市)城戸事務局長、園山次長、安田課長補佐出席
- 31 退職職員辞令交付(別掲)
常務理事退任辞令交付(別掲)
6. 1 常務理事新任辞令交付(別掲)
- 2 城山谷古墳群発掘調査終了(5.23～)
- 5 小田大谷古墳(宮津市)発掘調査開始
長岡京跡右京第498次調査(長岡京市・乙訓土木)発掘調査開始
- 7 小田蛭子谷古墳発掘調査開始
- 8 小田大谷古墳(宮津市)発掘調査終了
- 8～9 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於:名古屋市)木村事務局長、園山次長、安田課長補佐出席
- 9 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於:京都市)土橋主任調査員出席
- 14 監事監査
- 20 第44回役員会・理事会(於:ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事、川上 貢、足利健亮、都出比呂志、井上満郎、藤田价浩、梅野 宏、武田 暹、堤 圭三郎の各理事、奥田俊治監事出席
- 27 木村事務局長、府南部現地視察
- 28 黒部遺跡(弥栄町)関係者説明会
長岡京連絡協議会
7. 1 第73回埋蔵文化財セミナー(別掲)
- 7 左坂墳墓群(大宮町)関係者説明会
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主催者会議(於:大山崎ふるさとセンター)安藤次長、小山調査第1課長出席
- 11～12 木村事務局長、府北部現地視察
- 13 木村事務局長、乙訓地域現地視察
- 13～14 著作権セミナー(京都府総合教育センター)小山調査第1課長、今村主事出席
- 14 職員研修—京都における中世土器の編年—講師:伊野近富係長
- 18～19 中澤圭二副理事長、黒部遺跡現地視察

- 24 木村事務局長、釜ヶ谷遺跡(木津町)現地視察
 - 25 長岡京跡右京第498次調査(長岡京市・乙訓土木)関係者説明会
 - 26 長岡京連絡協議会
 - 28 都出比呂志理事、植物園北遺跡(京都市)、長岡京跡(京都市・名神PA)現地視察
植物園北遺跡現地説明会
2. 普及啓発事業
- 7. 1 第73回埋蔵文化財セミナー開催(於: 国民年金健康センター「丹後おおみや」)

一丹後・但馬の弥生から古墳へ一河野一隆「弥栄町・奈具墳墓群の発掘調査について」、今田昇一「大宮町・左坂墳墓群発掘調査について」、小寺 誠「兵庫県出石町・入佐山3号墳の発掘調査について」

3. 人事異動

- 5. 31 城戸秀夫常務理事・事務局長退任
森 正、岸岡貴英、石崎善久、藤井整の各調査員退職(京都府教育庁へ復職の後、兵庫県へ派遣)
- 6. 1 木村英男常務理事・事務局長就任
(安藤信策)

受贈図書一覧 (7. 5～7)

釧路市埋蔵文化財調査センター	釧路市北斗遺跡Ⅴ、釧路市東釧路貝塚調査報告書、東釧路第3遺跡・緑ヶ岡1遺跡
(財)水沢市埋蔵文化財調査センター	水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第1集 石田Ⅱ遺跡、同第2集 常盤広町遺跡、同第3集 姉体車堂Ⅱ遺跡、同第4集 常盤小学校遺跡
(財)山形県埋蔵文化財センター	年報 平成6年度
(財)いわき市教育文化事業団	いわき市埋蔵文化財調査報告第40冊 東北横断自動車道関連遺跡、同第41冊 泉第三土地区画整理事業地内埋蔵文化財予備調査報告、いわき市教育文化事業団 年報、いわき市教育文化事業団研究紀要第6号、福島県文化財調査報告書第309集 落合遺跡
(財)茨城県教育財団	茨城県教育財団文化財調査報告第91集 野殿深作遺跡、同第92集 山崎遺跡・滑川浜館遺跡、同第93集 柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区、同第94集 原出口遺跡、同第95集 沢田遺跡、同第96集 於山遺跡、同第97集 小泉館跡、同第98集 平出久保遺跡、同第99集 小山遺跡・八幡前遺跡、年報14 平成6年度、研究ノート4号 平成6年度
(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査事務所	(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第11集 武田Ⅷ
(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター	栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター年報 第5号、研究紀要 第3号
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	研究紀要12、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第168集 南蛇井増光寺遺跡Ⅲ、同第177集 下高瀬上之原遺跡、同第178集 荒砥大目遺跡、同第180集 中山与惣平衛塚遺跡、同第184集 黒熊栗崎遺跡、同第186集 下田中中道遺跡・下田中川久保遺跡、同第192集 小角田前Ⅰ・Ⅱ遺跡、北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査終了展図録ーレールの下の歴史ー
埼玉県立埋蔵文化財センター	埼玉県立埋蔵文化財センター年報4
(財)千葉県文化財センター	千葉県文化財センター調査報告第269集 千葉県中近世城跡研究調査報告書第15集、同第270集 市原市永田窯跡群第2次調査報告書、同第271集 流山市上新宿貝塚発掘調査報告書、同第272集 山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書
(財)長生郡市文化財センター	(財)長生郡市文化財センター調査報告第21集 台遺跡、同第22集 堀口横穴墓、同第23集 和合遺跡、同第24集 田向遺跡、同第25集 中原遺跡、同第26集 宮島遺跡、同第27集 押日遺跡、同第28集 要害遺跡・要害城跡、徳島下谷遺跡、長生郡市文化財センター年報No. 8
(財)山武郡市文化財センター	道塚横穴・ヤグラ群、山中台遺跡、財団法人山武郡市文化財センター 年報No. 10
(財)印旛郡市文化財センター	財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第66集 石川阿ら地遺跡、同第67集 上野遺跡・出口遺跡、同第71集 高岡遺跡群Ⅲ、同第79集 木戸先遺跡、同第81集 印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書、同第88集 宗吾南地区確認調査報告書、同第89集 上福田向台遺跡、同第94集 本佐倉城跡発掘調査報告書、同第97集 宮内遺跡発掘調査報告書、同第101集 新地遺跡第1地点、同第103集 井ノ崎台遺跡Ⅱ、同第105集 獅子穴Ⅱ遺跡
(財)東京都教育文化財団 東京都埋蔵文化財センター	研究論集ⅩⅢ・ⅩⅣ、資料目録7、汐留遺跡、尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査概要Ⅲ、東京都埋蔵文化財センター年報14、東京都埋蔵文化財センター調査報告第18集 多摩ニュータウン遺跡、同第19集 多摩ニュータウン遺跡 平成4年度
(財)かながわ考古学財団	かながわ考古学財団年報No. 1(平成5年度)、甦る池子の歴史、かながわ考古学財団調査報告1 長津田遺跡群Ⅰ、同2 青根上野田遺跡、同3 池子遺

	跡群Ⅱ、同4 宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第6集
(財)長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財センター年報10 1993、同11 1994、長野県立歴史館開館記念企画展図録 赤い土器のクニ
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団	新潟県埋蔵文化財調査報告書第65集 鉄砲町遺跡、同第66集 百塚東D遺跡、同第67集 高畑城跡、同第69集 宮平遺跡・虫川城跡・中ノ山遺跡、同第70集 蟹沢遺跡・上城遺跡、新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度、研究紀要 1995
多治見市文化財保護センター	北丘35号窯発掘調査報告書 多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第30号、滝呂日影1号窯発掘調査報告書 同第33号、明和39号窯発掘調査報告書 同書第36号、小名田小滝古窯跡群 同第39号、多治見市文化財保護センター研究紀要 第1号
(財)土岐市埋蔵文化財センター	丸山窯跡発掘調査報告書
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第9集 暁窯跡、平成6年度 瀬戸市埋蔵文化財センター年報
(財)滋賀県文化財保護協会	平成6年度調査埋蔵文化財展 レトロ・レトロの展覧会
(財)大阪府文化財調査研究センター	大阪府下埋蔵文化財研究会(第32回)資料
(財)大阪市文化財協会	天満本願寺跡発掘調査報告Ⅰ
(財)枚方市文化財研究調査会	枚方市文化財年報14(1992年度分)
高槻市立埋蔵文化財調査センター	高槻市文化財調査概要X X I 嶋上遺跡群19、高槻市文化財年報 平成5年度、「ハニワ工場公園」史跡新池埴輪製作遺跡整備事業報告書、マンガで案内する ハニワ工場公園
奈良国立文化財研究所	重点領域研究『遺跡探査』ニュースレター合冊No. 1～No. 10、平城宮発掘調査出土木簡概報(30) 二条大路木簡4、平城京木簡一 長屋王家木簡一 図版・解説 奈良国立文化財研究所史料第41冊、1994年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報、平城宮跡資料館図録
鳥根県埋蔵文化財調査センター	古代文化記録集 しまねの古代文化第2号、古代文化叢書1 出雲国風土記論究、森遺跡・板屋Ⅰ遺跡・森脇山城跡・阿丹谷辻堂跡、松本古墳群、鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窯跡、古代文化研究 第3号、鳥根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター年報Ⅲ 平成6年度、上塩冶横穴群第20・21支群、飯田C遺跡・古八幡付近遺跡・嘉久志遺跡、塩津山1号墳、遺跡が語る古代の安来、陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡、オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡、平ラⅡ遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財報告25、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94 足守川河川改修工事に伴う発掘調査、同98 津寺遺跡2・松尾古墳群・斎宮古墳・馬屋遺跡ほか
倉敷埋蔵文化財センター	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第4集 王子が岳南麓遺跡
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	讃岐 あゆみ・わざ・ちえ、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅲ、高松城跡 平成6年度、多肥松林遺跡 鹿伏・中所遺跡 平成6年度、空港跡地遺跡発掘調査概報 平成6年度、県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成6年度、多肥松林遺跡 平成6年度、平池南遺跡 平成6年度
小樽市教育委員会	塩谷6遺跡Ⅱ 平成6年度小樽市埋蔵文化財調査概報
松前町教育委員会	史跡 福山城X I 平成5年度発掘調査概要報告
平取町教育委員会	平取町文化財調査報告書Ⅰ ピバウシ2遺跡、同Ⅱ 平取町荷負2遺跡、平取町カンカン2遺跡
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第180集 大倉遺跡範囲確認調査報告書、同第189集 平成5年度 年報15、同第194集 郡山遺跡X V、同第195集 仙台平野の遺跡群、同第193集 伊古田遺跡
前橋市教育委員会	平成5年度文化財調査報告書第24集

高崎市教育委員会	中大類金井分遺跡、岩押町Ⅰ遺跡、高崎市遺跡調査会報告書第37集 大八木熊野堂Ⅱ遺跡、飯塚西金井遺跡、元島名瓦井遺跡、高崎市文化財調査報告書第134集 浜川芦田貝戸遺跡Ⅲ、同第135集 高関村前Ⅱ遺跡・高関東沖・村前遺跡、同第136集 高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書9、同第138集 東町Ⅳ遺跡
志木市教育委員会	志木市の文化財第21集 志木市遺跡群Ⅵ
鳩山町教育委員会	鳩山町埋蔵文化財調査報告第17集 竹之城・石田・皿沼下遺跡
千葉市教育委員会	埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成6年度
木更津市教育委員会	三箇遺跡群、野焼A遺跡、塚原30号墳・31号墳、永作第1号墳、鶴ヶ岡1号墳・鶴ヶ岡遺跡・俵ヶ谷遺跡
山武町教育委員会	平成6年度 山武町不特定遺跡発掘調査報告書
東京都教育庁文化課分室	東叡山寛永寺護国院Ⅰ・Ⅱ
北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告第16集 豊島馬場遺跡
神奈川県教育委員会	神奈川埋蔵文化財調査報告37
横浜市教育委員会	平成6年度 神奈川県指定史跡市ヶ尾横穴古墳群(B群)保存整備事業報告書
鎌倉市教育委員会	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度
茅ヶ崎市教育委員会	文化資料館調査研究報告3
八代町教育委員会	八代町埋蔵文化財調査報告書第9集 山梨県指定史跡 岡・銚子塚古墳
富山市教育委員会	富山市飯野新屋遺跡発掘調査概要
氷見市教育委員会	氷見市埋蔵文化財調査報告書第17冊 氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ、同第19冊 朝日貝塚Ⅰ
小杉町教育委員会	小杉町白石遺跡発掘調査報告、小杉町東山Ⅱ遺跡発掘調査報告
金沢市教育委員会	金沢市額新町遺跡 金沢市文化財紀要116、金沢市本町一丁目遺跡 同117、金沢市南新保D遺跡 同118、上荒屋遺跡Ⅰ 同120、金沢市額谷カネカヤブ遺跡 同121、平成6年度 金沢市埋蔵文化財調査年報 同122
武生市教育委員会	武生市埋蔵文化財調査報告17 王子保窯跡群Ⅶ
三方町教育委員会	三方町文化財調査報告書第13集 白屋北山古墳群・白屋北山城跡
岐阜市教育委員会	文化財グラフ ぎふ 第15号、御望遺跡、寺田遺跡
大垣市教育委員会	大垣市埋蔵文化財調査概要 平成5年度
鈴鹿市教育委員会	鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅱ 平成6年度、伊勢国分寺・国府跡2
安濃町教育委員会	安濃町埋蔵文化財発掘調査報告6 内多馬場遺跡発掘調査報告書
滋賀県教育委員会	北萱遺跡発掘調査報告書、穴太遺跡発掘調査報告書1、ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅣ-3 黒橋・八甲遺跡、同XⅣⅠ-3 在土北・尼子遺跡、同XⅣⅠ-4 北落古墳群Ⅰ、県営かんがい排水事業関連発掘調査報告書X-5 中屋遺跡、岩屋古墳試掘調査報告書
草津市教育委員会	草津市文化財調査報告書25 草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書(Ⅸ)、平成5年度 草津市文化財年報
五個荘町教育委員会	五個荘町文化財調査報告27 五個荘町内遺跡発掘調査報告書Ⅳ
大阪市教育委員会	平成5年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市文化財報告10 ひつ池窯、同13 大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書5
泉南市教育委員会	第7回歴史の華ひらく泉南シンポジウム 古代の技術革新、泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅡ
柏原市教育委員会	平野・大県古墳群分布調査概報、柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1994年度、平野遺跡、平尾山古墳群 1994年度、柏原市遺跡群発掘調査概報 1994年度
河内長野市教育委員会	河内長野市埋蔵文化財調査報告書XⅠ 天野山金剛寺遺跡・三日月遺跡
高石市教育委員会	高石市内民家調査報告書、高石市文化財発掘調査概要1994-1
八尾市教育委員会	八尾市文化財調査報告31 八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅰ、同32 八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ、八尾市文化財紀要7
枚方市教育委員会	枚方市文化財調査報告第29集 枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1994、平成4年度市民歴史講座 飛鳥・奈良時代の河内と大和
貝塚市教育委員会	貝塚市埋蔵文化財調査報告第33集 堀新遺跡、同第34集 津田遺跡、同第35集

三田市教育委員会	貝塚市遺跡群
龍野市教育委員会	三田市文化財情報 平成6年度合冊号
小野市教育委員会	龍野市文化財調査報告14 尾崎遺跡Ⅱ、同15 養久山・前地遺跡
	播磨国大部荘現況調査報告書Ⅴ、山田の里地区発掘調査報告書追録、第1回
	小野市文化財講座講演内容集 浄土寺をさぐる、小野市施行40周年記念事業
	シンポジウム記録集
加東郡教育委員会	埋蔵文化財調査年報(1992年度)
和田山町教育委員会	和田山町文化財調査報告書第7集 大盛山遺跡
西紀・丹南町教育委員会	西紀・丹南町文化財調査報告第15集 西紀町遺跡分布地図
中町教育委員会	中町文化財報告8 安坂・北山田遺跡 坂本・丁田遺跡、同9 多哥寺遺跡
奈良市教育委員会	奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度、奈良市埋蔵文化財センター
	紀要 1994、平城京東市跡推定地の調査ⅩⅢ
橿原市教育委員会	図録『橿原市の文化財』、橿原市埋蔵文化財発掘調査概報 平成6年度
天理市教育委員会	長寺遺跡(第13次)・長赤遺跡(第14次)・柳本遺跡竹ノ尻地点(第2次)
大和郡山市教育委員会	大和郡山市文化財調査概要29 松山古墳Ⅲ第4次、同30 郡山城第36次、同31
	神ノ木遺跡、同32 来光遺跡第2次、同33 内山瓦窯1号窯、平成5(1993)年
	度 大和郡山市文化財年報・紀要Ⅰ、大和郡山市・指定文化財目録、大和郡
	山市遺跡地図
倉吉市教育委員会	長谷遺跡発掘調査報告書、倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅷ、古神宮古墓発掘
	調査報告書、二タ子塚遺跡発掘調査報告書、不入岡遺跡群発掘調査概報
北条町教育委員会	北条町埋蔵文化財報告書16 町内遺跡発掘調査報告書第4集、同17 曲第1遺
	跡(曲岡遺跡)発掘調査報告書第1集、同18 曲古墳群発掘調査報告書第2集
	曲226号墳
益田市教育委員会	益田氏関連遺跡群Ⅰ・Ⅱ、石見空港開港1周年記念事業まちづくりシンポジ
	ウム 歴史の扉を開く
岡山市教育委員会	足守藩武家屋敷跡
広島県教育委員会	中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告5 小倉山城跡 1992・1993、冠遺跡
	群Ⅳ、広島県の埋蔵文化財
庄原市教育委員会	庄原市文化財調査報告書3 堺谷鍛冶跡
下関市教育委員会	下関市埋蔵文化財調査報告書50 武久西原遺跡、同51 松ヶ坪遺跡
福岡県教育委員会	上の原遺跡Ⅲ、長島遺跡Ⅰ、外之隈遺跡Ⅰ、大庭・久保遺跡、柿原Ⅰ縄文遺
	跡、徳永川ノ上遺跡Ⅰ、鋤先遺跡、宇野代遺跡、上唐原遺跡Ⅰ、久良々遺
	跡・倉良遺跡・天神田遺跡、仮塚南遺跡、栗崎遺跡 福岡県文化財調査報告
	書第120集、三毛門放生田遺跡 同第121集、大宰府史跡 平成6年度発掘調査
	概報、白木西原遺跡Ⅱ 立花町文化財調査報告書第8集、城ノ原遺跡 黒木町
	文化財調査報告書第2集、野町十三塚遺跡 山川町文化財調査報告書第2集、
	久原遺跡群Ⅲ 久山町文化財調査報告第3集、鼓釜床1号古窯跡報告書 小石
	原村文化財調査報告書第5集、一本杉2号古窯跡 同第6集、能満寺古墳群
	太平村文化財調査報告書第9集、城井遺跡群Ⅱ 犀川町文化財調査報告書第
	4集、水原有吉遺跡 椎田町文化財調査報告書第5集、牛頭天王遺跡・垂水
	高木遺跡 新吉富村文化財調査報告書第8集
福岡市教育委員会	福岡城 月見櫓 福岡市埋蔵文化財調査報告書第316集、志賀島・玄界島 同第
	391集、博多43 同第392集、博多44 同第393集、博多45 同第394集、博多46
	同第395集、博多47 同第396集、博多48 同第397集、那珂遺跡13 同第398集、
	那珂14 同第399集、東那珂遺跡1 同第400集、比恵遺跡群(15) 同第401集、
	比恵遺跡群(16) 同第402集、比恵遺跡群(17) 同第403集、比恵遺跡群(18)
	同第404集、堅粕2 同第405集、同第406集 雀居遺跡2、同第407集 雀居遺
	跡3、席田青木遺跡 同第408集、中南部(4) 同第409集、板付遺跡 同第410
	集、井尻B遺跡2 同第411集、井尻B遺跡3 同第412集、野多目台 同第413
	集、警弥郷B遺跡2 同第414集、福岡城跡 同第415集、鴻臚館跡5 同第416
	集、長尾遺跡 同第417集、四箇遺跡25次調査・熊本遺跡2次調査 同第418集、
	藤崎遺跡10 同第419集、クエゾノ遺跡 同第420集、東入部遺跡群4 同第421

	集、四箇船石1 同第422集、田村遺跡X I 同第423集、入部V 同第424集、小笠木 同第425集、有田・小田部第21集 同第426集、有田・小田部第22集 同第427集、四箇周辺遺跡群(6) 同第428集、周船寺遺跡群 同第429集、大原A遺跡1 同第430集、大原A遺跡2 同第431集、桑原遺跡群 第1次発掘調査報告 同第432集、大原C遺跡1 同第433集、都地遺跡(4) 同第434集、飯氏二塚古墳 同第435集、徳永古墳群3・女原上ノ谷製鉄址 同第436集、吉武遺跡群Ⅶ 同第437集、野方久保遺跡3 同第438集、史跡 板付遺跡 環境整備報告 同第439集、飯倉D遺跡 同第440集、福岡市埋蔵文化財年報 Vol. 8
北九州市教育委員会	北九州市文化財調査報告書第50集 中谷遺跡、同第53集 堺町遺跡第二地点、同第58集 南方浦山古墳、同第62集 高津尾遺跡Ⅲ、同第63集 下貫遺跡(第2次)、同第64集 小倉城跡1、同第65集 岡遺跡Ⅲ区、同第66集 加用遺跡
太宰府市教育委員会	太宰府市の文化財第25集 筑前国分尼寺跡Ⅲ、同第26集 大宰府天満宮Ⅲ、同第27集 大宰府・佐野地区遺跡群V、同第28集 大宰府条坊跡Ⅶ、同第29集 大宰府条坊跡Ⅷ
豊前市教育委員会	求菩提
直方市教育委員会	西日本銀行直方支店 直方市文化財調査報告書第17集、須崎町公園遺跡 同第18集、直方市遺跡詳細分布調査報告書 同第19集
北野町教育委員会	古賀ノ上遺跡1 北野町文化財調査報告書第2集
稲築町教育委員会	山野の石像群 稲築町文化財調査報告書第3集
佐賀市教育委員会	佐賀市文化財調査報告書第57集 東高木遺跡Ⅱ、同第58集 増田遺跡群Ⅲ、同第59集 原ノ町遺跡Ⅱ、同第60集 友貞遺跡Ⅱ、同第61集 野田遺跡、同第62集 大西屋敷遺跡Ⅱ、同第63集 瀧遺跡
唐津市教育委員会	唐津市文化財調査報告書第61集 唐津市内遺跡確認調査(10)、同第62集 湊松本遺跡(2)、同第63集 徳蔵谷遺跡(2)、同第64集 「玄海幹線」工事に係る文化財確認調査
三加和町教育委員会	三加和町文化財調査報告書第9集 田中城跡Ⅲ
香々地町教育委員会	香々地町文化財調査報告書Ⅰ 香々地の遺跡Ⅰ
宮崎市教育委員会	伊屋ヶ谷遺跡・小原山第1遺跡・小原山第2遺跡・金剛寺原第2遺跡・阿部ノ木遺跡
串間市教育委員会	市内遺跡発掘調査概要報告書 東堀遺跡
日向市教育委員会	寺ノ上遺跡
鹿兒島市教育委員会	鹿兒島市埋蔵文化財発掘調査報告書(19) 甲突川川底遺跡
牧園町教育委員会	牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 九日田遺跡2
北上市立博物館	北上市立博物館研究報告書 第10号
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第23号
秋田県立博物館	秋田県立博物館研究報告 第20号、秋田県立博物館館報 平成6年度
栃木県立なす風土記の丘資料館	栃木県立なす風土記の丘資料館年報第2号(平成5年度版)
群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館調査報告書第6号、群馬県立歴史博物館所蔵資料目録 考古・考古Ⅱ、群馬県立歴史博物館要覧
埼玉県立さきたま資料館	調査研究報告 第8号
千葉県立中央博物館	千葉県立中央博物館研究報告 人文科学 第4巻第1号
千葉市立加曾利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第22号、縄文土器のつくり方
市立市川考古博物館	市立市川考古博物館年報 第21・22号
府中市郷土の森	総合博物館府中市郷土の森 展示解説書、府中市郷土の森紀要 第5～8号
大田区立郷土博物館	明治時代の水産絵図
長野県立歴史館	長野県立歴史館 研究紀要第1号
松本市立考古博物館	松本市文化財調査報告No.116 高宮遺跡、同No.117 和田遺跡・桜田遺跡・堂田遺跡・樋渡し遺跡、同No.118 岡田町遺跡Ⅱ、同No.119 平田本郷遺跡Ⅱ、同No.120 平田北遺跡Ⅲ

- 富山市考古資料館
氷見市民俗資料館
岐阜県博物館
静岡市立登呂博物館
沼津市歴史民俗資料館
- 愛知県陶磁資料館
名古屋市見晴台考古資料館
- 一宮市博物館
半田市立博物館
斎宮歴史資料館
滋賀県立安土城考古博物館
- (仮称)琵琶湖博物館開設準備室
大阪府立弥生文化博物館
- 大阪市立博物館
吹田市立博物館
柏原市立歴史資料館
八尾市立歴史民俗資料館
茨木市立文化財資料館
大阪城天守閣
兵庫県立歴史博物館
西脇市郷土資料館
- 春日町歴史民俗資料館
香芝市二上山博物館
鳥取県立博物館
広島県立歴史博物館
広島県立歴史民俗資料館
山口県立山口博物館
土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム
北九州市立考古博物館
- 熊本県立熊本博物館
ミュージアム知覧
- 筑波大学歴史・人類学系
千葉大学文学部
東京大学文学部考古学研究室
早稲田大学文化財調査室
早稲田大学考古学会
早稲田大学図書館
早稲田大学校地埋蔵文化財調査室
明治大学考古学博物館
國學院大學文学部考古学研究室
- 富山市考古資料館紀要 第14号
氷見市民俗資料集成 I、氷見市近世史料集成 第17冊 陸田家文書その二
岐阜県博物館報 第18号
平成5年度弥生人体験クラブ活動記録 登呂の弥生人3
沼津市歴史民俗資料館資料集12 古文書(6)江梨区有文書目録(2)、同13 沼津市第四国民学校児童作文集 飛行機雲、沼津市博物館紀要19
特別企画展 茶の湯の美
名古屋市見晴台考古資料館年報12、高蔵遺跡、扇田町遺跡、春日野町遺跡、古沢町遺跡、志賀公園遺跡、石神遺跡・玉ノ井遺跡・高蔵遺跡(第7次)発掘調査報告書
平成6年度企画展 漁の技術史、法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書
特別展 終戦50年 戦争とくらし
春季特別展 日本の櫛、平成6年度 斎宮歴史博物館年報
祭と政—古墳時代のまつりかたち—、第8回企画展「東家文書は語る—江戸時代の安土—」、平成6年度 年報、紀要 第3号
琵琶湖博物館開設準備室研究調査報告第4号「丸子船の復元—琵琶湖最後の帆走木造船—」
平成7年度春季特別展 弥生人の食卓、弥生文化博物館研究報告第3集、弥生文化博物館要覧
大阪市立博物館研究紀要第27冊、大阪市立博物館報 No. 34
平成6年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報
柏原市立歴史資料館 展示ガイド
研究紀要 第6号、絵はがきに見る大正・昭和の世相
葦分神社東方遺跡発掘調査概要報告書、平成6年度 発掘調査概報
大阪城天守閣紀要 第23号、テーマ展 石山合戦と下間仲之
兵庫県立歴史博物館紀要 塵界 第8号
西脇市文化財調査報告書5 緑ヶ丘古墳、西脇市郷土資料館紀要「童子山」第3号
史跡 黒井城跡保存管理計画策定報告書
第7回特別展 二上山麓の石が語る世界
郷土と博物館 第40巻第1・2号
菅茶山とその世界
平成7年度考古企画展 弥生のかたち、年報第16号 平成6(1994)年度
山口県立山口博物館研究報告 第21号、館報18
山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第11集 土井ヶ浜遺跡
研究紀要 Vol. 2、北九州市立考古博物館年報 平成6年度、第13回特別展 弥生の鉄文化とその世界
熊本博物館館報No. 6
「チベット曼荼羅と仏たち」展図録、紀要 第1号、館報 第1号
筑波大学 先史学・考古学研究 第6号
大寺山洞穴 第2次発掘調査概報
東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第13号
下戸塚遺跡の調査 第3部古代編、井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録 古代 第99号
古代 第99号
大久保山Ⅲ 早稲田大学本庄校地文化財調査報告3
明治大学考古学博物館 館報No. 10
國學院大學文学部考古学実習報告第24集 物見処遺跡1993、同第25集 物見処遺跡1994、同第26集 柳又遺跡A地点

- | | |
|-------------------------|--|
| 日本大学史学会 | 史叢 第52号 |
| 東洋大学文学部史学科研究室 | 東洋大学文学部紀要第48集 史学科篇第20号、白山史学 第31号 |
| 東海大学校地内遺跡調査団 | 東海大学校地内遺跡調査団報告 5、弥杉・上ノ台遺跡 |
| 奈良大学文学部考古学研究室 | 文化財学報 第12・13集 |
| 島根大学埋蔵文化財調査研究センター | 島根大学構内遺跡(橋繩手地区)発掘調査概報 I |
| 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター | 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 8 冊 津島岡大遺跡 5 |
| 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会 | 広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報 X II |
| 熊本大学文学部考古学研究室 | 高畑赤立遺跡 |
| 熊本大学埋蔵文化財調査室 | 熊本大学埋蔵文化財調査室年報 第 1 集 |
| 日本窯業史研究所 | 日本窯業史研究所報告第44冊 上の台古墳、同第45冊 赤田地区遺跡群 集落編 I、第 1 回企画展 汽車土瓶 |
| 東邦考古学研究会 | 東邦考古 第19号 |
| (株)名著出版 | 歴史手帖 第23巻 5～8号 |
| 落川・一の宮遺跡(日野 3・2・7号線)調査会 | 落川・一の宮遺跡調査略報 III |
| 葛飾区遺跡調査会 | 葛飾区遺跡調査会調査報告第32集 鬼塚遺跡 IV |
| 都営川越道住宅遺跡調査会 | 武蔵台東遺跡発掘調査概報 5 |
| 雄山閣出版(株) | 季刊 考古学 第52号 |
| 朝日新聞社 | オランダ陶器 響きあう東と西 |
| ユネスコ東アジア文化研究センター | Recent Archaeological Discoveries In The Republic Of KOREA、Recent Archaeological Discoveries In The People's Republic Of CHINA、Recent Archaeological Discoveries In INDIA、Recent Archaeological Discoveries In PAKISTAN、Recent Archaeological Discoveries In JAPAN |
| 日本考古学協会 | 日本考古学年報46(1993年度版)、日本考古学 第 1 号 |
| (財)江戸東京歴史財団 | 東京都江戸東京博物館調査報告書第 1 集 常設展示製作に伴う調査報告 1 |
| 玉川文化財研究所 | 本入遺跡第 2 次発掘調査報告書、神成松遺跡発掘調査報告書、東有馬遺跡発掘調査報告書、小田原城三の丸東堀第 2 地点発掘調査報告書 |
| 鎌倉考古学研究所 | 長谷小路周辺遺跡、平成 5 年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 福泉やぐら群、若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 第一・二次調査、若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 |
| (財)古代学協会 | 古代文化 第47巻第 5～8号、平安京出土土器の研究 古代学研究所研究報告 第 4 輯 |
| 高山歴史学研究所 | 歴史学12号 |
| 淡神文化財協会 | 西本 6 号遺跡発掘調査報告書 |
| (財)のじぎく文化財保護研究財団 | 玉津田中遺跡発掘調査報告書 II |
| 六甲山麓遺跡調査会 | 本山北遺跡 |
| 奈良県立橿原考古学研究所 | 橿原考古学研究所紀要 考古學論攷第19冊、鳥谷口古墳 奈良県文化財調査報告書第67集、新庄町南藤井和田古墳群 同第68集、宇陀郡大宇陀町後出古墳群 同第69集、奈良県遺跡調査概報 1989年度(第 1 分冊)、同1990年度(第 2 分冊)、同1992年度(第 1 分冊)、越部ハサマ遺跡 大淀町文化財調査報告第 1 冊、毛原廃寺周辺における遺跡調査、山添村毛原周辺遺跡—第 6 次—発掘調査概報、斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書 |
| 広島県草戸千軒町遺跡調査委員会 | 草戸千軒町遺跡発掘調査報告 III |
| 博物館等建設推進九州会議 | 文明のクロスロード Museum Kyushu 通巻49号 |
| 吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所 | 佐賀県文化財調査報告書第113集 吉野ヶ里、同第119集 平原遺跡 I、同第120集 平原遺跡 II、平成 4 年度・5 年度 吉野ヶ里遺跡発掘調査の概要 |

- 京都市埋蔵文化財調査センター
 (財)向日市埋蔵文化財センター
 京都府教育委員会
 長岡京市教育委員会
 宇治市教育委員会
- 田辺町教育委員会
 加茂町教育委員会
 綾部市教育委員会
 福知山市教育委員会
- 網野町教育委員会
 三和町役場三和町史編さん室
 京都府立総合資料館
 京都府立山城郷土資料館
 京都府立丹後郷土資料館
 京都国立博物館
 京都市歴史資料館
 向日市文化資料館
- 亀岡市文化資料館
- 綾部市資料館
 加悦町古墳公園はにわ資料館
- 佛教大学総合研究所
 (財)京都ゼミナールハウス
 精華町の自然と歴史を学ぶ会
 京都府知事公室国際課
- 足利健亮
 小山雅人
- 中山清隆
 橋本清一
 豆谷和之
 森島康雄
 山本裕作
 遊佐和敏
- 京都市内遺跡発掘調査概報 平成6年度、京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度、京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度
 向日市埋蔵文化財調査報告書 第39集
- 埋蔵文化財発掘調査概報(1995)、恭仁京 発掘調査20年の成果から
 Nagaokakyo Culture & Nature、長岡京市文化財調査報告書 第33冊
 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第27集 白川金色院、同第29集 宇治市街遺跡、文化財宇治 94
- 田辺町埋蔵文化財調査報告書第20集 宮の口4号墳
 加茂駅周辺特定土地地区画整理事業に伴う文化財発掘調査概報
 綾部市文化財調査報告 第20集、同第21集、同第22集 新庄遺跡
 福知山市文化財調査報告書第28集、興・観音寺遺跡 同第29集、小山古墳群 同第30集
- 京都府網野町文化財調査報告第10集 町内遺跡
 三和町史 上巻(通史編)
 資料館紀要 第23号
 山城郷土資料館報第12号(1994)、企画展資料19 村をくぎるもの
 青龍三年銘鏡とその周辺
 平成5年度 京都国立博物館年報
 京都市の文化財(第7回)
 向日市古文書調査報告書第四集 上植野区有文書調査報告書、向日市文化資料館報第10号 平成5年度
 第19回企画展「一絲文守と丹波・法常寺」、第20回企画展 展示図録「亀岡発掘40年」
 第3回特別展示 ヒミコの箱
 滝岡田古墳 加悦町文化財調査報告第22集、明石裏ノ谷遺跡・入谷西D1号墳 同第23集
- 佛教大学総合研究所紀要 第2号
 京都国際セミナー「安定社会の総合研究」第5回セミナー
 波布理曾能 第12号、精華町の郷土誌(その2) 波布理曾能10年の歩み
 京都府国際化プラン-21世紀 京都から世界へ-
- 北稜に光を観る 玄武計画調査研究資料集
 三世紀の考古学 上巻~下巻、古代の日本 第3~6巻、図説 日本文化の歴史 ①~③、埋蔵文化財研究会第15回研究集会発表要旨・研究集会資料、弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題Ⅰ~Ⅲ、弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題 第Ⅰ~Ⅲ分冊、古墳時代前半期の古墳出土土器の検討 第Ⅰ~Ⅳ分冊、古代の対外交渉 第Ⅰ・Ⅱ分冊・追加資料、弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について 発表記録・資料、埋蔵文化財研究会第16回研究集会資料 第1・2冊、弥生時代の青銅器とその共伴関係 第Ⅰ~Ⅳ分冊、シンポジウム「月影式」土器について 資料編・報告編、大阪府下埋蔵文化財研究会(第22回)資料、堺市文化財調査報告第16集 四ツ池遺跡
 東京都 ホリキリ谷戸上遺跡
 古代埋蔵文化財の材質と製作技法に関する科学的研究
 山口大学構内遺跡調査研究年報 XI・XII
 出土銭貨 第3号
 東播磨 第2号
 東邦考古 第19号

編集後記

情報57号が完成しましたのでお届けします。

本号では、当調査研究センターで毎年行っている共同研究事業の成果として、「中世土器の編年」を掲載しました。今回はまだ一部分ですが、今後も続きを掲載していく予定ですのでご期待下さい。また、前年度から今年度にかけて実施した調査のなかで、特に成果のあがったものを中心に抄報も掲載しますので、ご高覧いただければ幸いです。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第57号

平成7年9月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中 西 印 刷 株 式 会 社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)